

兵庫県伊丹市

# 有岡城跡

発掘調査報告書Ⅸ

1993.12

伊丹市教育委員会

兵庫県伊丹市

# 有岡城跡

発掘調査報告書Ⅸ

1993.12

伊丹市教育委員会



## 序

伊丹の地は、六甲山地、北摂・長尾連山、千里丘陵に囲まれた武庫平野にあり、市の東西には、阪神間の二大河川である猪名川と武庫川が流れています。そして、猪名川の清流を望む平野や伊丹台地には、遙か遠く原始時代から今日まで、悠久の歴史を有する地域として広く知られています。

特に弥生時代から古代・中世に至る歴史的遺跡や社寺などの文化財が数多く存在し、伊丹市域のもつ歴史的連続性と重厚さを教えてくれます。

やがて到来する21世紀を前にして、物質的豊かさからこころの豊かさや人間の尊厳を確立していく営みが強く求められています。

私たちの伊丹市においても「生命の輝きをたたえ青春の喜びがこだまする都市」をめざしていくために「歴史を今に生かす」という理念に基づいた新しいまちづくりを進めていかなければなりません。

私たちが未来に向かって大きく前進、飛躍していくためには、人びとの生活の歴史から深く、そして謙虚に学び、新しい時代を創造していかなければなりません。そしてそのことが「個性豊かな歴史と文化のまち」に誇りと愛着がもてるようになるものと確信します。

さらに「明るく、こころ豊かに暮らせる快適・便利で、魅力あふれる都市づくり」をめざしている本市の基本方針を実現する前提であり、文化財保護行政の原点でもあります。

伊丹市域の中核となっている市街地に所在する有岡城跡と伊丹郷町遺跡は、伊丹市発展の基礎となったものであり、私たちにとってかけがえのない貴重な文化遺産であり、埋蔵されているこれら多くの遺跡を調査し、記録・保存していくことは現代に生きる私たちの責務でもあります。

昭和62年9月から昭和63年2月までの6ヵ月にわたる現地調査と平成3年度1ヵ年の整理作業を実施し、ここに、その調査成果を報告書として刊行することになりました。

今回の調査にあって全面的なご協力、ご尽力をいただきました大阪経済法科大学村川行弘教授、大手前女子大学藤井直正教授に衷心より深堪なる敬意と感謝を申し上げ、発刊のことばといたします。

平成5年3月

兵庫県伊丹市教育委員会

教育長 乾 一 雄

## 例 言

- (1) 本書は、兵庫県伊丹市伊丹1丁目を中心とする岡城跡・伊丹郷町遺跡発掘調査のうち、第52次・53次・56次・58次・59次調査の成果をまとめたものである。
- (2) 第58次調査は、道路拡張事業に伴い市の単独事業として行ない、その他は個人住宅建設及び店舗付住宅建設に伴って国庫補助事業として行なった。
- (3) 発掘調査は、昭和62年度に実施した。各々の期間は次のとおりである。

第52次調査	昭和62年9月24日～昭和62年10月20日
第53次調査	昭和62年9月24日～昭和62年10月20日
第56次調査	昭和62年11月14日～昭和62年11月19日
第58次調査	昭和63年1月18日～昭和63年1月31日
第59次調査	昭和63年2月4日～昭和63年2月10日

- (4) 整理作業は、平成3年4月～平成5年3月にかけて、市立稲野小学校埋蔵文化財整理室において実施した。
- (5) 本文は第1章第1節を細川佳子、その他を小長谷正治が担当し、遺物観察表は岡野理奈・三輪隆子・細川佳子が作成した。
- (6) 整理作業は、遺物実測を三輪隆子・岡野理奈が、遺構・遺物のトレースを沖高広子が行ない、遺物の写真撮影を小長谷正治・伊藤秀樹が行なった。
- (7) 発掘調査は伊丹市教育委員会小長谷正治が担当し、次の各氏の協力を得て行なった。

第52・53次調査	村下 佳子・伊藤 潔・田中 賢人
第56次調査	伊藤 潔
第58次調査	橋本 正幸・西原 雄大・村下 佳子 西安 正治・横山 聖二
第59次調査	橋本 正幸

- (8) 発掘調査・整理調査にかかわる事務局の組織は次のとおりである。

昭和62年度	平成3・4年度
教 育 長	教 育 長
教 育 次 長	教 育 次 長
社 会 教 育 部 長	生 涯 学 習 部 次 長
社 会 教 育 課 長	” 主 幹
社 会 教 育 課 主 査	” 副 主 幹
”	” 事 務 吏 員
” 事 務 吏 員	

## 目 次

第 1 章 調査概要	1	第 2 節 第53次調査	11
第 1 節 遺跡の概要	1	第 3 節 第56次調査	35
第 2 節 調査の概要	5	第 4 節 第58次調査	37
第 2 章 調査成果	7	第 5 節 第59次調査	55
第 1 節 第52次調査	7	第 3 章 結語	59

## 挿図目次

図 1 遺跡の位置図	1	図25 第56次調査出土遺物実測図	36
図 2 有岡城範囲図	2	図26 第58次調査地点図	37
図 3 調査地点図	5	図27 調査区設定図	37
図 4 第52次調査地点図	7	図28 第58次調査遺構実測図(1)	39
図 5 調査区設定図	7	図29       "          (2)	41
図 6 第52次調査遺構実測図	8	図30 第58次調査出土遺物実測図(1)	45
図 7 第52次調査出土遺物実測図	10	図31       "          (2)	46
図 8 第53次調査地点図	11	図32       "          (3)	47
図 9 調査区設定図	11	図33       "          (4)	48
図10 第53次調査遺構実測図	13	図34       "          (5)	49
図11 第53次調査出土遺物実測図(1)	18	図35       "          (6)	50
図12       "          (2)	19	図36       "          (7)	51
図13       "          (3)	20	図37 第59次調査地点図	55
図14       "          (4)	21	図38 調査区設定図	55
図15       "          (5)	22	図39 第59次調査遺構実測図	56
図16       "          (6)	23	図40 第59次調査出土遺物実測図	57
図17       "          (7)	24	図41 文禄伊丹之図	60
図18       "          (8)	25		
図19       "          (9)	26		
図20       "          (10)	27		
図21       "          (11)	28		
図22 第56次調査地点図	35		
図23 調査区設定図	35		
図24 第56次調査遺構実測図	36		

## 写真図版目次

PL, 1 a	有岡城跡・伊丹郷町遺跡現況	PL, 14	第53次調査出土遺物(4)
1 b	有岡城跡・伊丹郷町遺跡現況	PL, 15	" (5)
PL, 2 a	第52次調査全景	PL, 16	" (6)
2 b	第53次調査地点遠景	PL, 17	" (7)
PL, 3 a	第53次調査第1遺構面全景	PL, 18	" (8)
3 b	" 第2遺構面全景	PL, 19	" (9)
PL, 4 a	第53次調査検出遺構	PL, 20	" (10)
4 b	"	PL, 21	" (11)
4 c	"	PL, 22	" (12)
PL, 5 a	第53次調査遺物出土状況	PL, 23	" (13)
5 b	"	PL, 24	" (14)
5 c	第53次水琴窟検出状況	PL, 25	" (15)
PL, 6 a	第56次調査全景	PL, 26	" (16)
6 b	第58次調査第1遺構面全景	PL, 27	" (17)
PL, 7 a	" 第2遺構面全景	PL, 28	" (18)
7 b	" 第3遺構面全景	PL, 29	第53次・56次・58次調査出土遺物(1)
PL, 8 a	" 第4遺構面全景	PL, 30	第58次調査出土遺物(2)
8 b	堀跡検出状況	PL, 31	" (3)
PL, 9 a	第58次調査検出遺構	PL, 32	" (4)
9 b	"	PL, 33	" (5)
9 c	"	PL, 34	" (6)
PL, 10 a	第59次調査全景	PL, 35	" (7)
10 b	"	PL, 36	" (8)
PL, 11	第52次・53次調査出土遺物(1)	PL, 37	第59次調査出土遺物(1)
PL, 12	第53次調査出土遺物(2)	PL, 38	" (2)
PL, 13	" (3)		

## 表 目 次

表1	第52次調査出土遺物観察表	9	表7	第53次調査出土遺物観察表(6)	34
表2	第53次調査出土遺物観察表(1)	29	表8	第56次調査出土遺物観察表	36
表3	" (2)	30	表9	第58次調査出土遺物観察表(1)	52
表4	" (3)	31	表10	" (2)	53
表5	" (4)	32	表11	" (3)	54
表6	" (5)	33	表12	第59次調査出土遺物観察表	58

# 第1章 調査概要

## 第1節 遺跡の概要

**遺跡の立地** 伊丹市は兵庫県の東南部に位置し、東は大阪府池田市・豊中市と府県境を画している。南は尼崎市を経て、大阪湾までの距離は約10kmである。西を六甲山地、北を長尾山地、東を千里丘陵に囲まれた西摂平野の北方の奥まったところにある。東を武庫川、西を猪名川に挟まれた地域には、長尾山地に端を発し、舌状に南へ張り出す伊丹台地（洪積台地）が形成されている。伊丹台地は北から順に山本面・安倉面・中野面と台地東縁に帯状に南北に延びる上加茂面の4面から成っている。有岡城が位置する上加茂面は、4面の中で最も高く発達し、他の面との境に段差がある。有岡城は伊丹台地の東縁にあたり、標高は15～20mである。東側に広がる猪名川低湿地帯との比高差は5～10mの急崖をなし、西側・南側も数mの段差がある。このように、有岡城は平城であっても、自然地形を最大限利用して築城されたといえる。また、有岡城の惣構の規模は南北1.6km、東西0.8kmで、南北に長い不整形をしている。

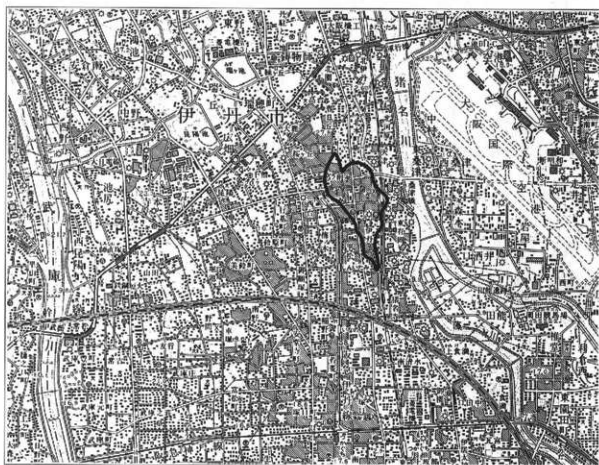


図1 遺跡の位置図 (1/50,000「大阪西北部」)



**有岡城の歴史** 有岡城の前身である伊丹城は、文和2年(1353)の「森本基長軍忠状」に初見される。伊丹氏は森本氏系図(北河原文書)にみることができる。伊丹城は度々戦乱に合うが、堀や土塁などの防禦施設が整っていて、堅固な城であり、永正17年(1520)の「細川両家記」によると、すでに惣構の祖型(外構)があったことがうかがえる。天正2年(1574)、織田信長方の荒木村重は伊丹親興を破り、伊丹城に入城し、信長の命で「有岡城」と改名した。より強固な城にするために、伊丹城時代の外構を利用して、城下町の周囲を堀と土塁で囲む「惣構」構造とし、その要所を岸の砦・上臈塚砦・輪塚砦が守った。天正5年(1577)に訪れたポルトガルの宣教師ルイス・フロイスが有岡城のことを「甚だ壮大にして見事なる城」と書き残している。天正6年(1578)、村重は石山本願寺攻めの時、信長にそむいて、有岡城は信長の大量軍に包圍され、1年余りの攻防の末、天正7年11月に落城した。村重の後、池田元助が領有するが、天正11年(1583)美濃に転封され、廃城となった。



図2 有岡城範囲図(1/10,000)

廃城後の文禄年間(1592~96)にはすでに伊丹村内に魚屋町・材木町・竹屋町などの15の町が成立していた。ここは初めは幕府の直轄地であった。公家の近衛家が領有するようになった寛文年間(1661~73)には17町、元禄年間には元の侍町に新しい町ができ24町に増加し、そして享保年間(1716~36)には27町となった。このように町人が住んでいた町を中心に、伊丹・北小路・昆陽口・大広寺などの15ヵ村が一続きになって伊丹郷町を形成していった。

伊丹郷町内では、領主の近衛家の保護もあり、酒造業が発達していった。伊丹は上方の江戸積酒造業の中心であった。樽廻船で清酒が江戸へ送られ、江戸では「丹醜」ともてはやされた。郷町内には、会所が置かれ、町の有力な酒造家の中から惣宿老や御金方らの役人が選ばれて、近衛家の指示を仰ぎながら町の政治を担当した。



#### 1. 有岡城跡主郭部

J R伊丹駅を中心とする南北170m、東西140mの範囲で、本丸のある主郭部の周囲には、石垣のない素堀りの堀と土塁が設けられていた。昭和58年より史跡整備が進められてきて、平成4年4月より史跡公園として開放されている。



#### 2. 岸ノ砦跡（猪名野神社）

惣構の北端に位置する。場所は現在の猪名野神社境内に推定されている。現在も堀跡と土塁が顕著に残っている。信長の有岡城攻めの時は、渡辺勘大夫が守っていた。



#### 3. 上關塚砦跡（墨染寺周辺）

惣構の中央部西辺付近に位置する。墨染寺境内に「女郎塚」の石碑が残る。その側面に「天正七年己卯十二月十三日落城」と刻まれている。信長の有岡城攻めの時、ここを守っていた中西新八郎が信長方に内応したため落城を早めた。

この付近の発掘調査では、古墳跡が発見され、埴輪が出土している。



#### 4. 鶴塚砦跡

惣構の南端に位置し、現代でも高さ5m、径20～30mの塚として残っている。砦の範囲は塚の周辺と考えられる。信長の有岡城攻めの時は、野村丹後を大将に雑賀衆が守っていた。

発掘調査によって出土した埴輪から、中期の古墳であるということがわかった。



#### 5. 北ノ口跡

惣構の北端にあたる。今でも通称北ノ口といわれている。有岡城の要所の一つで、絵図では、ここで道が虎口状に折れ曲がり、この北から斜面を降りて、「多田院ノ道」「池田道」に分かれている。



#### 6. 外構の跡

有岡城には、城下町の外側にも土塁と外堀が築かれていて、町ぐるみ守っていた。土塁は一部江戸時代まで残っていたが、伊丹郷町の拡大とともに消えていった。写真の地点は、惣構の南東部にあたり、堀跡は、現状は水路となっている。



#### 7. 寺町

惣構の西側にあたり、法巖寺・正善寺・大蓮寺と並び、通称「三軒寺」という。三軒とも浄土宗であり、法巖寺は大永2年（1522）に、大蓮寺は天正4年（1576）に、正善寺は天正17年（1589）に開創された。法巖寺のクスノキは県指定文化財となっている。



#### 8. 大坂道（有馬道）

この写真のあたりは、伊丹郷町の中央を南北に通る街道で、本町通りと並んで伊丹郷町の幹線を形成してきたものである。この道は当時、南へ向かう人にとっては大坂道、北へ向かう人にとっては有馬道といわれていた。現在でも、古い町並が残っている。

## 第2節 調査の概要

### 調査経緯

第52次・53次・58次の各調査は、伊丹市が計画している道路拡幅事業に伴って実施した。この道路拡幅事業は宮ノ前地区市街地再開事業に関連し、再開発事業地区に通じる南北の道路を拡幅改良するもので、これに伴い現状の建物の建替え工事が行なわれることになった。第52次・53次調査は店舗付住宅及び個人住宅建設に伴う事前調査で、昭和62年7月には具体的な計画がまとまり、8月15日に届出が提出された。市教委では、10月中旬より再開事業地区の別の発掘調査を予定しており、それまでにこの調査を完了する必要がある。そこで、現状の建物の解体が完了していた第52次調査地点を先に発掘調査を行ない、次いで第53次調査地点の調査に入ることとした。

第58次調査は、第53次調査地点の南隣の敷地にあたり、やはり道路拡幅事業が原因で建替え工事が

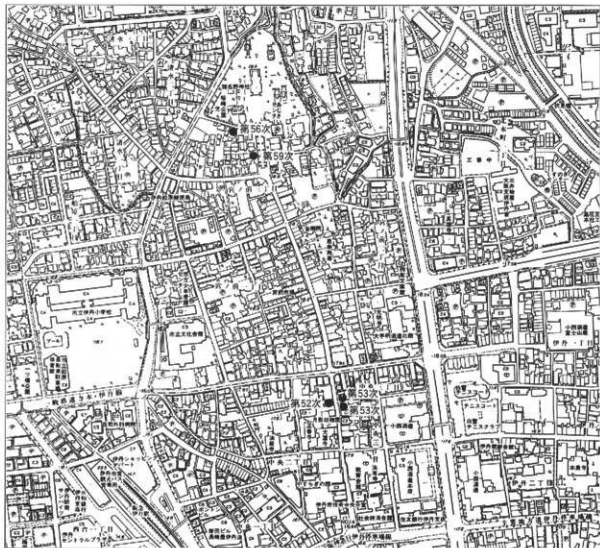


図3 調査地点図(1/5,000)

## 第1章 調査概要

行なわれることになった。現状の建物は伊丹郷町の古い町屋で、第53次調査中にはまだ解体されずに残っていた（PL.26）。しかし、12月までには解体され、同時に届出書が市教委に提出されることになった。市教委ではこの時期に前述の再開発事業地区内での発掘調査を実施中で、調査補助員の一部をこちらに割くことは難しいと思われたが、仮設医院で診療されている届出者から至急に工事を着工したい旨の要望が重ねてあったため、再開発事務所と市教委で協議し時期を早めて昭和63年1月18日から調査を開始することになった。幸い調査全般にわたって指揮できる橋本正幸氏が参加してくれることになり、二箇所の発掘を同時に進められることになった。

第56次・59次調査は、有岡城惣構の北辺に築かれた岸ノ磐跡の周辺部の調査である。ともに個人住宅の建替えに伴って実施した。第56次調査は、9月に届出の提出があったが、発掘調査が重なるという事情で、11月中旬の開始となった。59次調査は、住宅建設着工時期との関係で2月初旬には発掘調査を完了する必要があるが、届出書提出から時間を置かず発掘調査を実施することになった。

### 調査日誌抄

#### 第52次・53次調査

昭和62年9月24日	第52次調査地点の表土重機掘削を開始する。	11月16日	3m×9mの範囲で表土重機掘削を行なう。地山面まで30cmと浅いため、全体を地山面まで掘り下げる。
9月25日	第53次調査地点の表土重機掘削を開始する。		
9月28日	本日より作業員を増員し両地区の発掘作業を開始。	11月17日	遺構掘削作業を行なう。
9月30日	遺構の調査を初め、土層断面図作成する。(52次)	11月18日	平面実測・土層実測行なう。
10月2日	火災による焼土層を確認する。(53次)	11月19日	全景写真撮影後埋戻し作業を行なった。
10月3日	全景写真撮影を行なう。(53次)	<b>第58次調査</b>	
10月7日	53次調査地点の平面実測を開始する。	1月18日	表土重機掘削行なう。
10月9日	第2面の検出作業を行なう。(53次)	1月19日	第2面まで掘り下げ、遺構検出行なう。平板実測行なう。
10月15日	土坑53より多量の陶磁器が良好な状態で出土する。(53次)	1月20日	第3面まで掘り下げを行なう。
10月19日	土層図・平面図の作成を行なう。(52次・53次)	1月23日	第4面まで掘り下げを行なう。
10月20日	作業を完了し、埋戻す。	1月26日	地山面上にて堀跡を検出する。
		1月30日	現地説明会開催。200名参加。
		1月31日	実測を完了し、午後埋戻す。
		<b>第59次調査</b>	
		2月4日	表土重機掘削行なう。
		2月6日	遺構掘削し、午後写真撮影
		2月9日	平面実測・土層実測行なう。
		2月10日	埋戻し作業を行なう。

#### 第58次調査

11月14日	敷地内に調査範囲設定の作業を行なう。
--------	--------------------

## 第2章 調査成果

### 第1節 第52次調査

所在地 伊丹市中央2丁目417番2

調査面積 50㎡

調査期間 昭和62年9月24日～10月20日

#### 調査概要

第52次調査地点は、有岡城惣構の西端に位置し、江戸時代の伊丹郷町では昆陽口村に属している。昆陽口村は伊丹郷町から西へ向う昆陽道と、伊丹郷町の北端に鎮座する猪名野神社から南へ向う通りを中心に発達した村で、既に文禄年間には成立している。調査地点は、この内の猪名野神社から南へ向う通りに面しており、古くから町場となっていた場所である。

今回の調査は店舗付住宅建設に伴って実施したもので、新築建物建設予定範囲に調査区を設定した。表土は重機を用いて除去し、地山面上で全ての遺構を検出した。調査区の西側は旧建物の解体時に大きく擾乱されており、遺構は破壊されて残っていなかった。

#### 調査成果

発掘調査の結果、調査区内より井戸1基、竈1基、土坑32基を検出した。これらの遺構の時期は、出土した遺物からみると概ね江戸時代に属するもので、有岡城が廃城となる天正11年(1581年)を遡る時期のものは検出されていない。

次に検出した遺構と遺物について説明を加えたい。

#### 遺構

井戸 コンクリート製の型枠を用いている。井戸の内径は1.2mで、内部は砂で埋め戻されていた。

竈 土坑26に上部を切られている



図4 第52次調査地点図(1/5,000)



図5 調査区設定図(1/500)

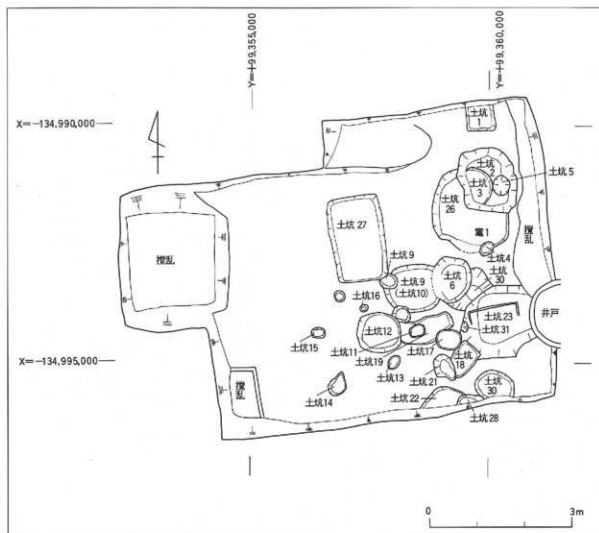


図6 第52次調査遺構実測図

ため、底面の焼けた粘土しか残っていない。竈の底面には平瓦が2枚敷かれていた。遺物が出土せず時期は不明である。

**土坑** 検出した32基の土坑の内、用途を特定できるものは少なく、内部に完形の燈明皿1点(図7-1)が出土した土坑15が注意をひく程度である。土坑15は、28cm×20cm、深さ22cmの方形の土坑で内部には皿1点と砂が充填されていた。砂は綺麗な川砂であることから、地鎮などの儀式のような跡の可能性が指摘される。土坑23は、1.5m×1.5m以上、深さ65cmの大型の土坑で、内部から多量の陶磁器片が出土した。図7に掲載した遺物はその一部である。出土状況からみて、日常使用される陶磁器の内、不用品を処分したゴミ穴と考えられる。

### 遺物

第52次調査地点から出土した遺物は、調査区が狭いこともあって出土量が少なく、図示できた遺物も総数11点である。図示した遺物はすべて遺構から出土したものである。

1は土坑15出土の燈明皿である。ロクロ成形されており、内面にはロクロ目が残る。また底部は糸切り底となっている。内面と口縁部外面には透明釉が施されている。2～9は土坑23出土。2は紙瓶

刷りの染付磁器碗。外面には花文などが描かれている、3～5は瓦質の製品である。3は蓋で上部に環状のつまみが付いている。蓋に深みがあり、身と深く重なる造りとなっていることから、火清壺の蓋と考えられる。4は口径が30.2cmと大型である。口縁端部は平坦に仕上げている。底部は欠損しているため、5のように脚が付いていたのか不明。5は底部に脚が3箇所付いている。4と5は共に火舎（火入れ）と考えられる。6と7は焙烙。ともに底部を欠損している。6は口縁部外面に粘土紐の跡をわずかに残すが、7は「ヘラナデ」により平滑に仕上げられている。8は唐津焼の鉢。口縁端部は玉縁状となる。内外面に鉄釉が施されているが、外面は中程までとなっている。高台は深く削り込んだ削り出し高台となっている。9は丹波焼の甕。胴部大半を欠損している。甕の最大径は肩部にあり底部に向けて径を減している。口縁部は強く外反している。肩部には数条の弱い沈線が全周する。地肌は赤く焼き上がっており、肩部の所々に自然釉が付着している。

10・11は土坑29出土。ともに唐津焼の「溝縁皿」である。10は灰色の胎土に薄緑色の灰釉がかかる。見込みに目跡はなく、高台登付には糸切り痕が残っている。11は見込みに砂目跡が残る。胎土は濃い赤褐色を呈し、内面に薄く釉がかかる。

### 小 結

第52次調査地点の発掘調査で検出した遺構には、有岡城廃城（天正11年＝1583年）以前に遡るものではなく、土坑29にみられる唐津焼砂目皿の時期が最も古い。そして、大多数の遺構は出土遺物や切り合い関係からみても江戸時代の所産と考えられ、中でも多くの陶磁器を出土した土坑23は、型紙刷り技法の染付磁器碗・焙烙の形態からみて18世紀前半頃に比定されよう。

当地点の土地利用状況を古絵図からみると、最も古い「文禄伊丹之図」（図41）には既に当地点に家並みが描かれており、伊丹郷町の中でも古くからの町場であったことが知られる。文禄年間（1592～95）といえ、有岡城廃城から10年ほどしか経過しておらず、この絵図に描かれている家並みは有岡城当時の町場をそのまま受けついでいたとも考えられる。しかし今回の調査では建物跡は検出されていないため、絵図の信憑性も含め今後検討する必要がある。

番号	機種	法 量	出土地点・備考	番号	機種	法 量	出土地点・備考
Fig. 7-1 Pl. 11-1	燈明皿 土師質	口径 6.1 器高 1.3	土坑15 ロクロ成形 糸切り底 透明釉	Fig. 7-7	焙烙	口径 23.4 器高 (5.15)	土坑23
Fig. 7-2 Pl. 11-2	磁器碗	口径 10.2 器高 5.4 底径 2.55	土坑15 型紙刷り	Fig. 7-8	陶器鉢 唐津	口径 18.9 器高 10.9	土坑23
Fig. 7-3 Pl. 11-3	瓦質土器 蓋	口径 21.15 器高 7.55	土坑23	Fig. 7-9 Pl. 11-7	陶器甕 丹波	口径 25.2 器高 (24.4)	土坑23
Fig. 7-4	瓦質土器 火舎	口径 30.2 器高 10.4	土坑23	Fig. 7-10 Pl. 11-5	陶器皿 唐津	口径 12.8 器高 3.1 底径 5.2	土坑29 溝縁皿
Fig. 7-5 Pl. 11-4	瓦質土器 火舎	口径 17.6 器高 8.4	土坑23	Fig. 7-11 Pl. 11-6	陶器皿 唐津	口径 13.6 器高 2.3 底径 4.4	土坑29 溝縁皿 砂目
Fig. 7-6	焙烙	口径 26.1 器高 (5.7)	土坑23				

表1 第52次調査出土遺物観察表



第2章 調査成果

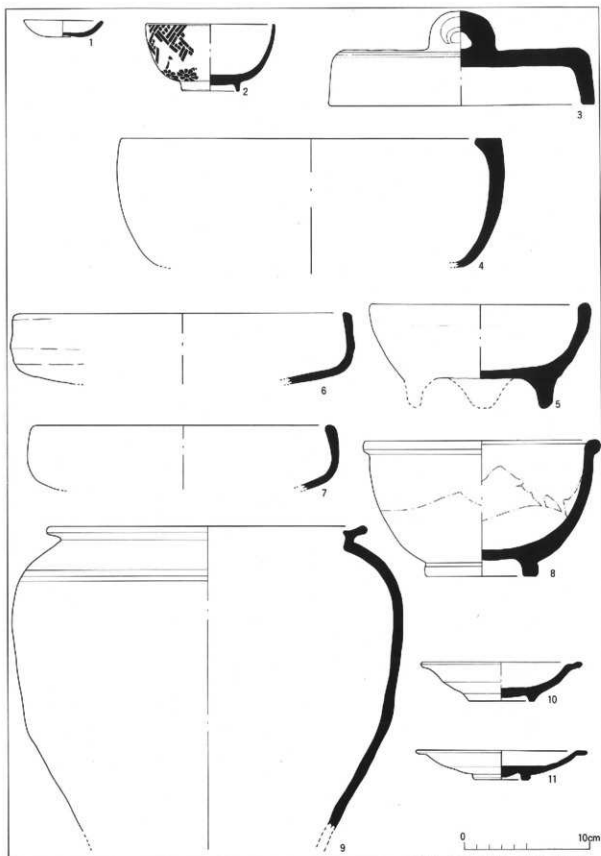


図7 第52次調査出土遺物実測図

1 土坑15, 2~9 土坑23, 10~11, 土坑29

## 第2節 第53次調査

所在地 伊丹市中央3丁目388番7

調査面積 100㎡

調査期間 昭和62年9月25日～10月20日

### 調査概要

第53次調査地点は、第52次調査地点の南北の通りを挟んで東側に位置しており、明治7年の町村合併以前は昆陽口村に属していた。昆陽口村の来歴については、第52次調査で述べたとおりである。

今回の発掘調査は、市道拡幅事業による個人住宅建替え工事に伴って実施した。敷地面積は180㎡あり、その中に5m×20mの調査区を設定した。表土など約20cmは重機を用いて除去し、それより下層は人力によって掘り下げることにした。表土を取り除いたところで、礎石などが確認されたため、その面を第1面として調査を始め、この面の調査を行なって後、調査区東半分のみ掘り下げて第2面の調査を実施した。

今回の調査は、木造住宅建設に伴うもので、工事によって遺跡が破壊される範囲は少ないため、建物の基礎工事で破壊の及ぶ地表下40～50cmまでの調査となった。従って最下層で検出される有岡城期の遺構面は、残念ながら未調査となっている。

### 調査成果

検出された遺構は第1面・第2面を併せると、井戸4基、溝1条、埋襲2基（便所）、水琴窟1基、焼土土坑2基、瓦だまり1基、土坑59基となる。これらの時期を出土遺物からみると、17世紀後半を古い時期として江戸時代の遺構と、水琴窟や埋襲（便所）のように明治以降の遺構がある。



図8 第53次調査地点図(1/5,000)



図9 調査区設定図(1/500)

## 層 序

調査区内の基本的な層序を説明しておきたい。南壁の土層断面から本遺跡の標準的な層序関係をみると、1層を掘り下げたところの固く締った土間の面の広がり第1面で、この土間は断ち割ると数cm程の厚みがある。調査区東側では数枚の土間が存在していた。

土間(第1面)を掘り下げると褐色砂質土(16層・17層)が堆積しており、その下には西側で焼土層(31層)が広範囲に堆積していた。この焼土層は火災によるものとみられる。焼土層は調査区東側では薄く堆積するか、場所によって全く認められなかった。第2面は概ねこの焼土層を取り除いたところである。

遺構以外から出土した遺物は、調査中便宜的に層名を付して取り上げている。遺物観察表にある第Ⅲ層は焼土層(第31層)から出土したもので、同第Ⅳ層はそのさらに下層より出土したものである。

## 遺 構

検出した遺構の内、主要なものを取り上げて説明しておきたい。

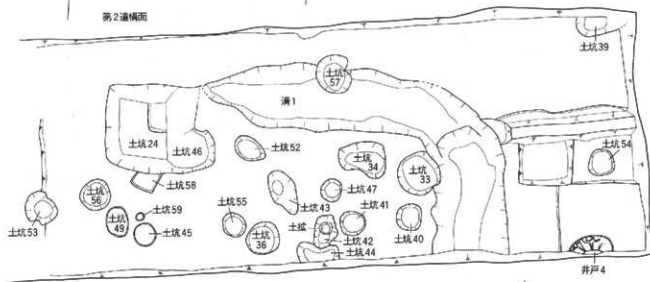
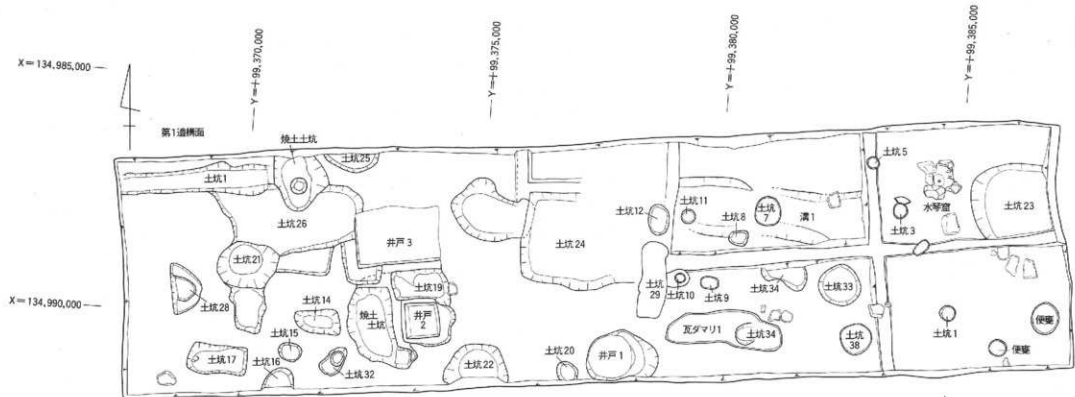
**井戸** 井戸は4基存在した。井戸2は、井戸の上部を漆喰を用いて方形に仕上げている。漆喰の厚さは約10cmとなっている。井戸3も同様に漆喰に周囲の壁と底を固めた施設で、規模は1.75m×1.2m、深さ約1mである。井戸3と井戸2の間は径30cmの穴でつながっている。井戸3は通常の井戸ではなく貯水施設と考えられ、井戸2と一体となって使用されたものと考えられる。両者の時期は、明治以降とみられる。井戸1は南壁沿いで検出された素掘りの井戸で、径は約1mである。内部より陶磁器(図19-164-167)が出土している。井戸4は南東隅より検出された瓦積みの井戸である。井戸の大部分が調査区外となっているため、一部のみの調査となった。井戸の壁面は瓦を平積みにする構造となっている井戸内部よりガラス瓶が出土しているので廃絶時期は新しい。

**溝** 調査区の東側において溝1が検出された。溝1は調査区の中央部より始まり、東に向けて延びた後直角に折れて調査区外に延びている。幅は1.15~1.65m、深さは20~35cmである。溝の埋土は大型の礫と炭化物で構成され、内部から多くの陶磁器(図17、18、19-160・161)が出土した。

**埋壘** 調査区の南西部に大小2基の壘が埋められていた。ともに便槽として使用されていたものと考えられる。伊丹郷町出土の便槽は、江戸時代には木桶が一般的で、明治以降には次第に壘を用い始める。本遺跡の埋壘は第1面において検出されており、しかも出土したレベルが高いことから近年まで使用されていたものと考えられる。便所の敷地における位置をみると、短冊型で奥行のある敷地の最も奥に設けられており、次に述べる水琴窟(庭跡)の位置との関係から伊丹郷町の町屋の構造の一端を知ることができる。

**水琴窟** 調査区の東奥に位置する。周囲に40~50cm大の石を5個配し、その中央部を漆喰で固めた施設が第1面が検出された。漆喰は中央部が低くなってその中心に径3cmの孔が開いていた。断ち割ってみると、その下から壘が伏せた状態で出土した。壘の底部には孔が穿たれており、その孔はちょうど漆喰の孔と重なる。壘の内部には何等の施設も認められず、壘方の中に壘を倒置しただけの構造であった。水琴窟の時期は、検出面が第1面であることや内部からビニール製品の小片が出土したことから、第1面の遺構でも新しい時期(明治以降)の所産と考えられる。

**土坑** 第1面、第2面併せて59基の土坑を検出した。土坑内部に陶磁器が多量に埋められた塵芥処理土坑のほかには、土坑の性格を明らかにできるものは少ない。陶磁器が多量に出土した土坑には、土坑19、23、33、39、53がある。土坑19は、土坑内部に焼土と炭が堆積しており火災後の塵芥を処理



CIT-53 南壁

- |              |                |
|--------------|----------------|
| 1. 褐色砂質土     | 19. 褐色砂質土      |
| 2. 褐色土       | 20. 褐色砂質土      |
| 3. オリーブ灰     | 21. 褐色砂質土      |
| 4. 褐色砂質土     | 22. 褐色砂質土      |
| 5. 土いれ褐色砂質土  | 23. 土いれ褐色砂質土   |
| 6. 褐色砂質土     | 24. 褐色砂質土      |
| 7. 褐色砂質土     | 25. 褐色砂質土      |
| 8. 褐色砂質土     | 26. 褐色砂質土      |
| 9. 褐色砂質土     | 27. 褐色砂質土(焼土層) |
| 10. 褐色砂質土    | 28. 褐色砂質土      |
| 11. オリーブ灰    | 29. 褐色砂質土      |
| 12. 土いれ褐色砂質土 | 30. 褐色砂質土      |
| 13. 土いれ褐色砂質土 | 31. 褐色砂質土      |
| 14. 赤褐色砂質土   | 32. 土いれ赤褐色     |
| 15. 土いれ褐色砂質土 | 33. 褐色砂質土      |
| 16. 褐色砂質土    | 34. 土いれ赤褐色砂質土  |
| 17. 褐色砂質土    | 35. 黄褐色粘質土     |
| 18. 黄        |                |

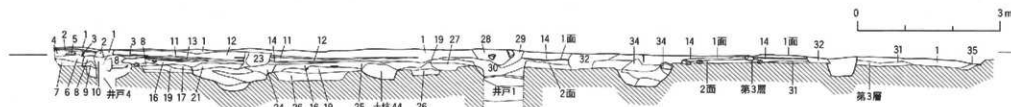


图10 第53次調査遺構実測図

したものと考えられる。土坑23は調査区東端で検出された瓦だまりで、多量の瓦に混じって陶磁器が出土した。土坑33は径90cmで、深さ30cmの円形土坑。桶を埋め込んだ埋桶と考えられ、土坑38と一組の便所跡とみられる。土坑39は瓦だまり。土坑53は径70cmの円形で、陶磁器が良好な状態で多量に出土した。

## 遺物

出土遺物のうち図示できたものは218点である。以下遺構別に説明しておきたい。

**土坑13(1)** 1は焙烙。底部はあまり突出せず緩やかな丸味をもち、口縁部はやや内傾する。口縁部外面には弱い段が残る。

**土坑16(2~4)** 2は手捏ね製土師皿。底部は平坦で、口縁部はわずかに外反する。内外面に煤の付着が著しい。3は鉄軸を施した陶器の蓋。4は内面に唐草文、見込みに五弁花を配した染付皿。見込みは蛇ノ目釉刺ぎ。

**土坑19(5~14)** 5と6は唐津焼系青緑釉皿。ともに内面青緑釉、外面は灰釉との掛け分けとなっている。7は印判染付碗。外面に五弁花を4個配している。見込みは蛇ノ目釉刺ぎが施されている。8は京焼写しの碗。外面に山水文が描かれている。9は陶器鉢。全体に薄く釉がかかる。丹波焼と考えられる。10も丹波焼の鉢。11は染付徳利。釉の発色が悪く、全体に灰色を呈す。底には高台が巡る。12は鋼製の柄鏡。背面には花文が浮き彫りされ、左端に「藤原作」銘がある。13も鋼製品。14は椀瓦。

**土坑20(15)** 15は手捏ね製の土師皿。口縁部に煤の付着が認められる。

**土坑21(16~18)** 16は給釉陶器碗。高台は露胎となっている。17は唐津焼系青緑釉皿、見込みは蛇ノ目釉刺ぎ。18は型紙刷りの染付碗。

**土坑22(19)** 19は染付草花文碗

**土坑23(20~27)** 20は手捏ね製の土師皿。21は白磁坏。22は青磁染付碗。23は椀瓦の唐草文軒平瓦。24は唐草文軒平瓦。25~27は三巴文軒丸瓦。

**土坑24(28~32)** 28は手捏ね製の土師皿。口縁部に煤が付着する。29は柿釉燈明受皿。30は京焼写しの陶器碗。外面には楼閣山水文が描かれている。31は染付碗。見込みには二重圏線内に菊花文が描かれている。32は青磁染付筒型碗。見込みに五弁花が描かれている。

**土坑26(33~35)** 33は染付梅文碗。高台裏に圏線が巡る。34は刷毛目文陶器鉢。口縁部は小さく強く外反する。35は搦鉢。12本単位の御目となる。堺焼と考えられる。

**土坑29(36)** 36は唐津焼系の青緑釉碗。内面は灰釉の掛け分けとなっている。高台は露胎。

**土坑33(37~50)** 37~39と41、42はロクロ成形の土師皿。37を除いて柿釉が施される。また、すべての底部は糸切り底となっている。40は手捏ね製土師皿。43は鉄軸を施した陶器蓋。中央部につまみが付く。土瓶の蓋とみられる。44は白磁の紅皿。45は染付梅文碗。46は行平鍋。内面に灰釉、外面に鉄軸が施されている。47と48は陶器蓋。上面にはイッチン技法により花文を描いている。49は青磁染付の蓋。50は鉄軸徳利。

**土坑34(51)** 51は瓦質の火舎。底部に三足が付く。

**土坑36(52、53)** 52は白磁皿。高台周辺は露胎となる。53は染付碗。

**土坑37(54~60)** 54、55、58、59はロクロ成形の燈明皿で、底部には糸切り痕が残る。56、57は手捏ね製の土師皿。外面に指紋が多数残る。60は刷毛目文陶器碗。

**土坑38(61、62)** 61と62は三巴文軒丸瓦。

**土坑39**(63~83) 土師皿が多数出土している。63~77は土師皿。66を除いてすべて手捏ね製である。法量に大小が認められ、大は口径10.4~11cmで、63~65、74~77が該当し、小は口径7.2~8cmのもので66~72が該当する。いずれも外面に指紋、手紋が明瞭に残っており、成形段階は手のひらの上で行なわれたことが確認できる。78は外面を鉄釉と灰釉の掛け分けにした陶器碗。瀬戸・美濃焼と考えられる。79は陶器碗。80は刷毛目陶器碗。蓋受けが付いている。81は外面に青緑釉、内面に灰釉を施した青緑釉皿。82は白磁香油壺。83は土人形。

**土坑41**(84、85) 84は染付碗の蓋。外面には竹文、内面には松竹梅文を描いている。85は土人形。

**土坑45**(86~88) 86は印判文染付碗。87は染付笹竹文碗。88は京焼写しの色絵陶器碗。

**土坑48**(89~98) 89は白磁皿。90は陶器の蓋。底部に糸切り痕が残る。91は陶器の平鉢。底部は平坦で口縁部は大きく開く。丹波焼。92は染付柳文碗。93は青磁染付碗。94は染付梅文碗。95は染付丸文碗。96は染付竹文碗。96の蓋は土坑41出土の84と同様のものであったと考えられる。97は色絵染付碗。見込みに金彩により花文を描いている。98は陶器筒型碗。外面には鉄釉により横縞文様か描かれる。瀬戸・美濃焼。99は面子。

**土坑53**(100~123) 100は柿釉燈明受皿。内面のみ施釉されている。101は陶器瓶の底部。102は陶器製の火入れ。口縁部外縁は使用による剥落が著しい。103は青磁皿。口縁が施されている。104は壺の底部。105は堺焼の播鉢。106は染付草花文杯。107~109、111~117は染付碗。文様は107が草花文、108が山水文、119、111、113、115、116が梅文である。114は印判技法により桐文が描かれている。110は白磁碗で、口縁が施されている。118、119は染付皿。ともに見込みが蛇ノ目釉刺ぎされている。120は素焼の花瓶。ロクロ成形で、底部に糸切り痕を残している。121は染付香油壺。122は石製品。文鎖か。123は三巴文軒丸瓦。

**土坑57**(124) 124は人物を型取った土人形。

**溝1**(125~161) 125~128は手捏ね製の土師皿。127は底部に丸味があるが、これ以外は扁平な底部となっている。129~131は焙烙。129は完形品。口縁部には粘土紐の段を残しているが130は成形されて平滑に仕上げられている。132は陶器製の火入れ。133は白磁皿。皿の底は極めて厚い。置付に離れ砂が付着している。134は唐津焼の胎土目の皿。口唇部に鉄釉が口鉢状に付けられている。135、138は京焼写しの陶器碗。ともに高台は露胎で、高台裏に円形の削り出しがある。136、140は兵器手の陶器碗。全釉されている。137、139、141は唐津焼系の刷毛目碗。142は陶器壺。丹波焼の特徴である赤土部釉が肩部から底部にかけて施されている。143は陶器鉢。削り出し高台。144は染付草花文碗。型紙刷りにより草花文を描いている。145は白磁杯。146は印判技法により、井桁文の中に桐文を描いた染付碗。147、148も染付碗。149は京焼写しの陶器碗。山水文が描かれている。高台は露胎である。150は内面に鼻須絵を描いた陶器の鉢。文様は葡萄文で、葉と長く伸びる蔓を描いている。151は染付皿。内面は手書きで草花文、外面は印判技法により松皮菱文と桐文などを組み合わせて描いている。153は白磁香油壺。152は徳利。丹波焼と考えられる。154は陶器製の小物。155は素焼の十能。把手の部分である。156は鳥を型取った土人形。157は陶器製の徳利。158は銅製の柄杓。柄の木質部が遺存している。159は一石五輪塔。地輪を欠いている。160、161は三巴文軒丸瓦。

**溝状遺構**(162、163) 162は手捏ねの土師皿。口縁部の煤の付着が認められる。163は播鉢。口縁部は直線的に開く。外面と口縁部内面には厚く鉄釉がかかる。卸目は極めて細かい。胎土は黄色味のある白色を呈している。

井戸1(164~167) 164は柿軸燈明受皿。165は瀬戸・美濃焼の陶器碗。外面は鉄軸と灰軸の掛け分け、内面は灰軸が施されている。166は染付梅文碗。167は染付松竹梅文碗。

第1層(表土)(168~180) 168は土師皿。内面には緑釉により簡単な文様が描かれている。169は陶器のぐい呑。170は磁器のぐい呑。ともに近代の所産である。171は紅皿。172は染付碗。173は青磁染付の皿。174は染付鳥文皿。175は端反りの色絵碗。176は印判手の染付碗。器面に菊文を配している。177は染付梅文碗。178は染付牡丹文碗。179は陶器製の火入れ。180は神酒徳利。器面に唐草文が描かれている。

第3層(焼土層)(181~202) 181~183は柿軸燈明皿。すべてロクロ成形で、底部に糸切り痕を残している。184は手捏ね製の土師皿。185は焙烙。底部は緩やかに丸味をもち、口縁部はやや内傾する。186は土製支脚。187は陶器皿。内外面に灰釉が施されている。188は三鳥手の大皿。外面の下半部には鉄軸が施されている。189は陶器の小碗。内外面に黄瀬戸釉が施されている。190は京焼写しの碗。高台裏に「小松吉」銘が印刻されている。191は陶器製の香炉。外面に刷毛目文が描かれている。192は陶器碗。腰部に鉄軸が施される。193は片口。高台裏に円形の削り出しと「新」銘が印刻されている。京焼写しと考えられる。194と195は染付皿。見込みは蛇ノ目軸割ぎされている。196~198は染付碗。199は柿軸花生。底部は糸切底となっている。200は陶器の徳利。201は風炉か焔炉の一部と考えられる。「堺湊焼」銘が印刻されていることから、堺焼と確認できる。202は三巴文軒丸瓦。

第4層(203~209) 203は焼塩壺。欠損部が多いため、銘の有無は不明。204は染付皿。内面に草花文を配している。釉調は全体に青味が強く、畳付には離れ砂の付着が認められる。205は陶器の皿。内面に山水文を描く手法は肥前産の京焼写しと共通する。206は染付け斜格子文皿。207は染付碗。208は僧侶を型取った土人形。209は三巴文軒丸瓦。

その他の遺物(210~218) 210は手捏ね製土師皿。211は京焼写しの陶器碗。内面に横間山水文が描かれている。212は染付碗。213は唐津焼系の刷毛目碗。214は瀬戸・美濃焼の陶器碗。外面は鉄軸と灰軸の掛け分け。215は染付碗。216は瓦の一種。217と218は寛永通宝。

## 小 結

第53次調査地点は、江戸時代の伊丹郷町では最も初期から町並が形成されており、伊丹郷町の氏神である野宮(猪名野神社)から南に延びる参道の間にあって賑った場所と考えられる。このことは現在残っている伊丹郷町絵図のうち、最も古い文禄伊丹之図や寛文九年伊丹郷町絵図において既に家並みが描かれていることから知られる。

しかし、前述したように今回の発掘調査では最下層までの調査は実施できなかった。従って、文禄の絵図に描かれた建物についての調査には至っていないと考えられ、第2遺構検出の溝1が遺構としては最も古いものとなる。溝1出土の陶磁器をみると、京焼写しの碗(135・136・138・139)や唐津焼の刷毛目碗などからみて17世紀後半~18世紀初めの頃と考えられる。そして、第1遺構面は、土坑19、土坑21、土坑23、土坑48、土坑53出土の陶磁器から判断すると、18世紀前半以降の時期が求められよう。

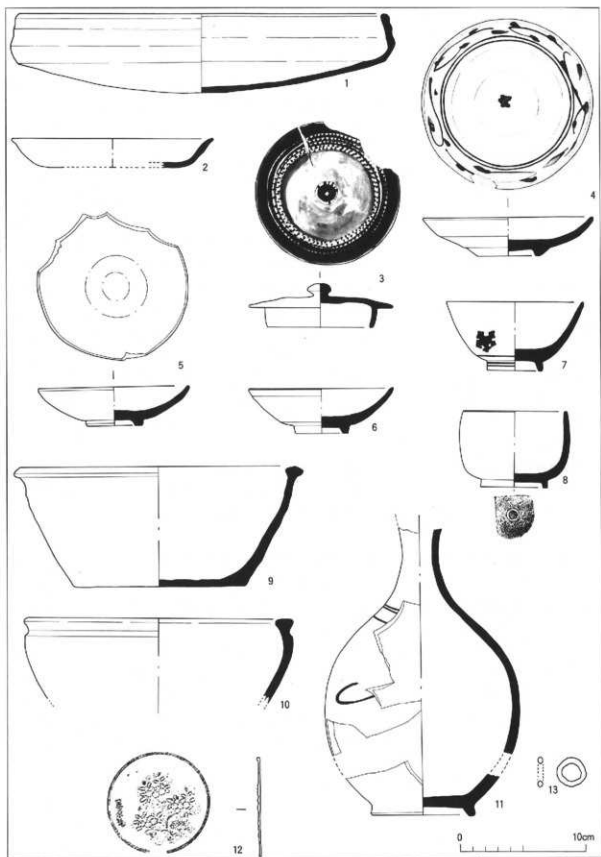


図11 第53次調査出土遺物実測図(1)

1 土坑13、2~4 土坑16、5~13 土坑19



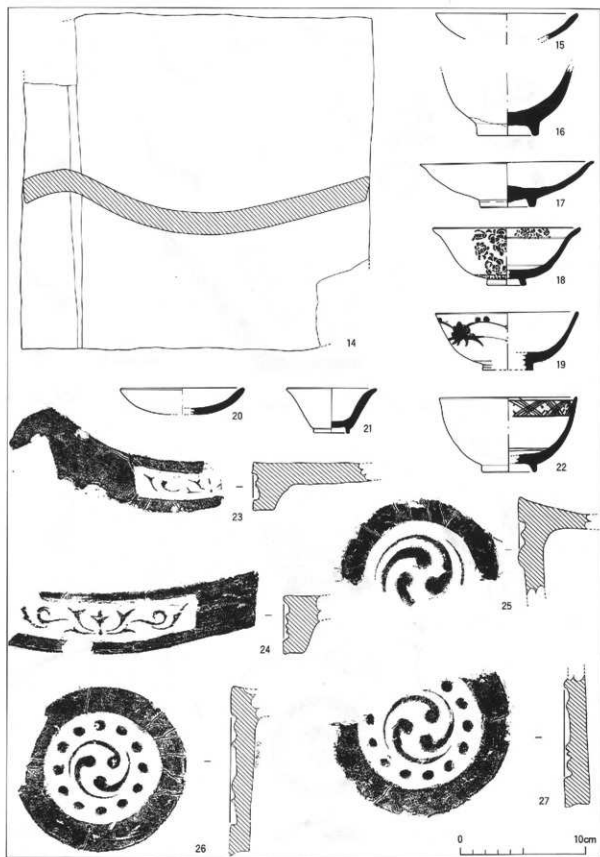


図12 第53次調査出土物実測図(2)

14 土坑19, 15 土坑20, 16~18 土坑21  
19 土坑22, 20~27 土坑23

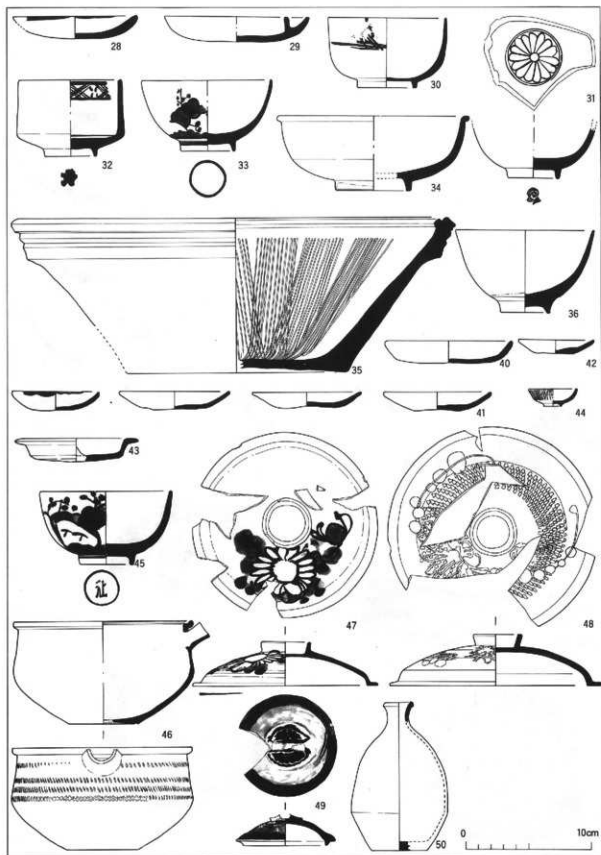


図13 第53次調査出土遺物実測図(3)

28～32 土坑24、33～35 土坑26、36 土坑29  
37～50 土坑33

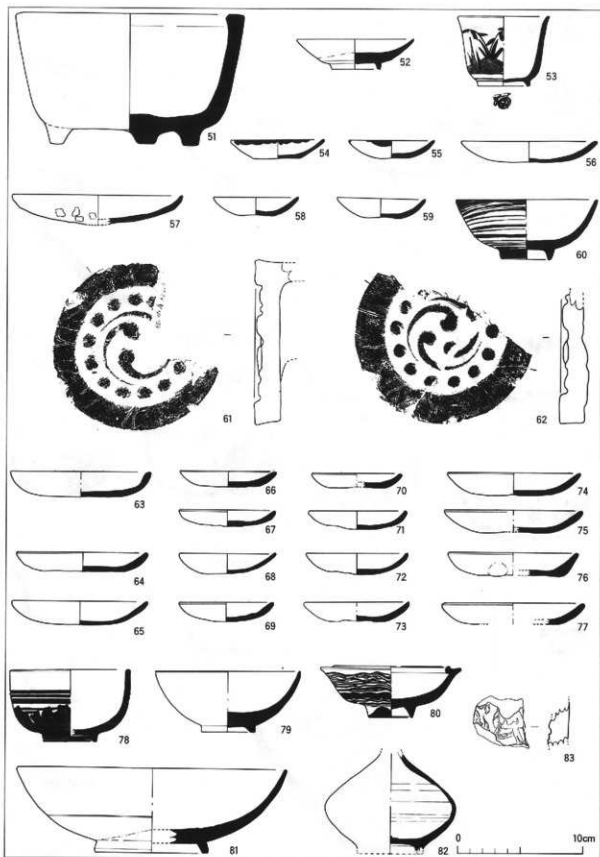


図14 第53次調査出土遺物実測図(4)

51 土坑34, 52-53 土坑36, 54-60 土坑37,  
61-63 土坑38, 64-83 土坑39

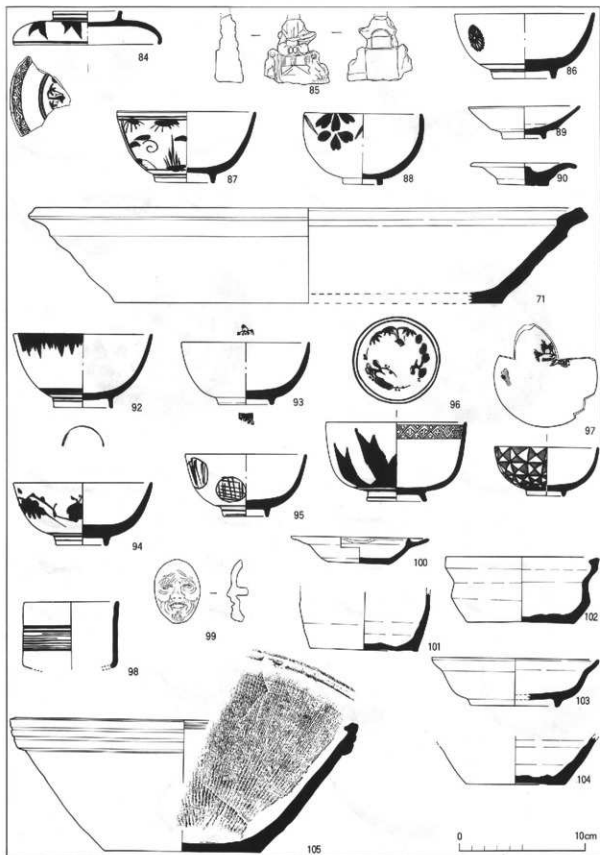


図15 第53次調査出土遺物実測図(5)

84・85 土坑41, 86~88 土坑45, 89~98 土坑48  
99 土坑51, 100~105 土坑53

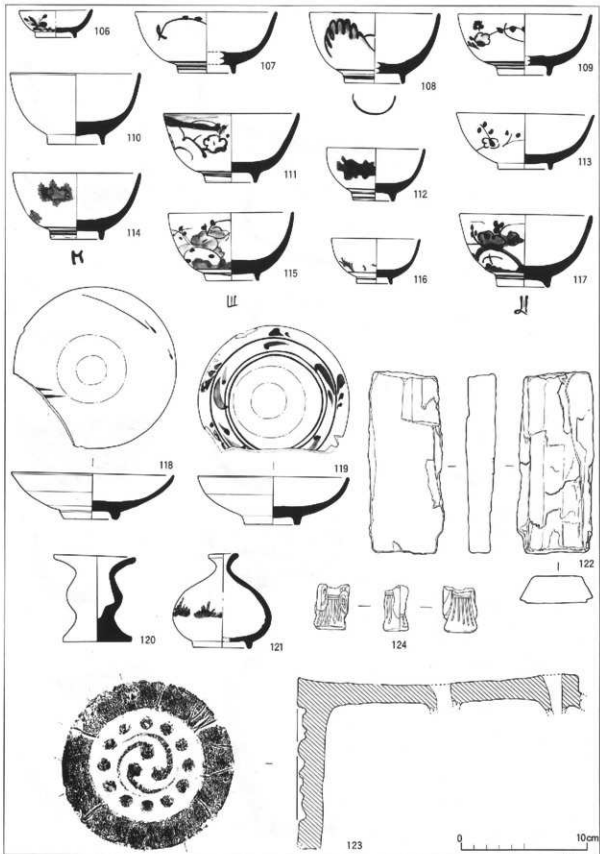


図16 第53次調査出土物実測図(6)

106~124 土坑53

第2章 調査成果

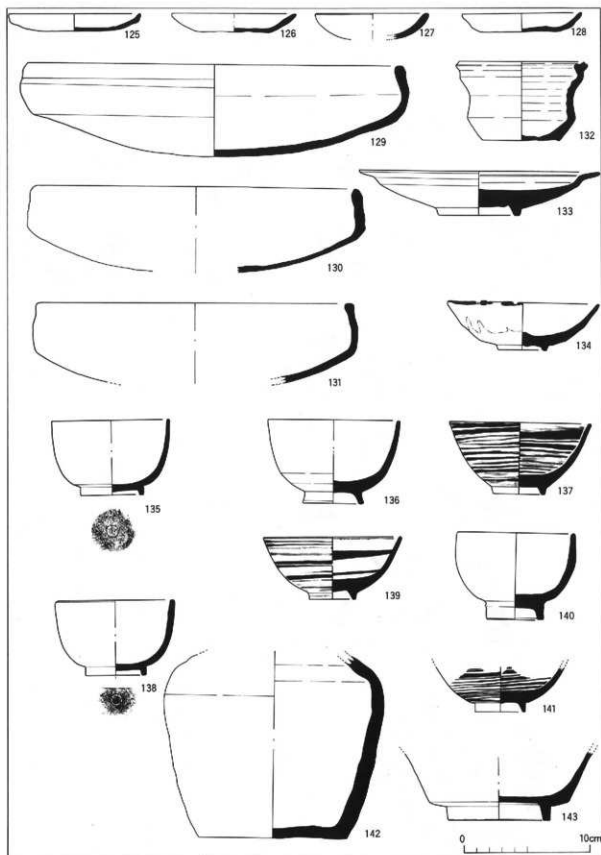


図17 第53次調査出土遺物実測図(7)

125~143 測1

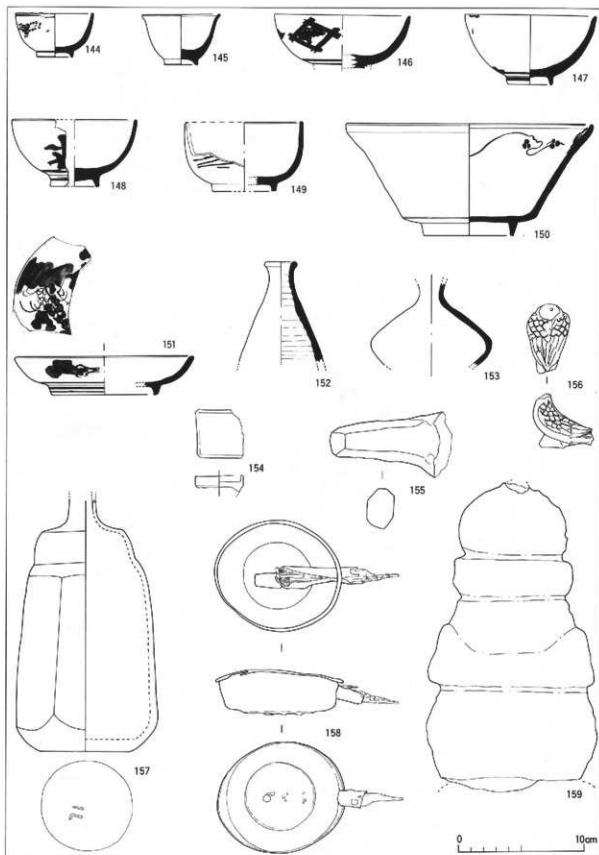


図18 第53次調査出土遺物実測図(8)

144~159 清1

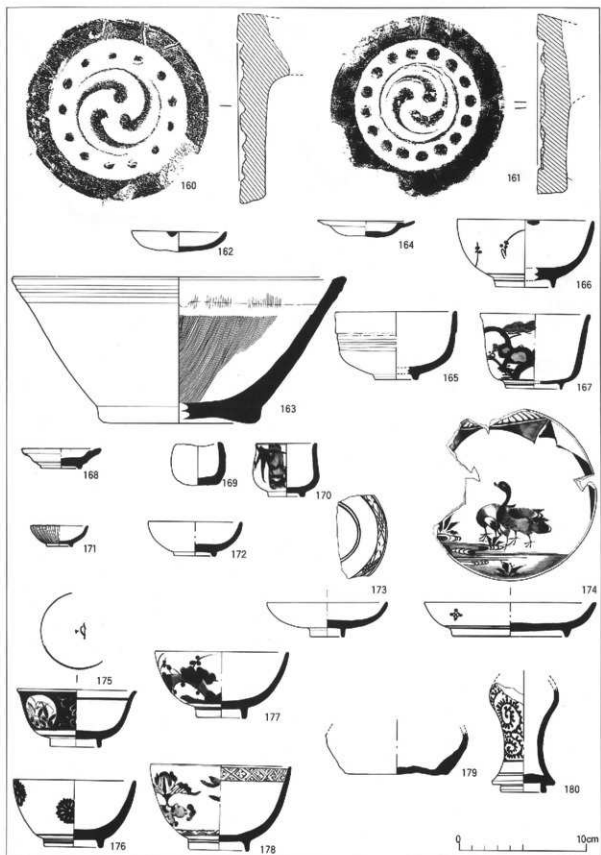


图19 第53次調査出土遺物実測図(9)

160~161 溝1, 162~163 溝状遺構  
164~167 井戸1, 168~180 表土



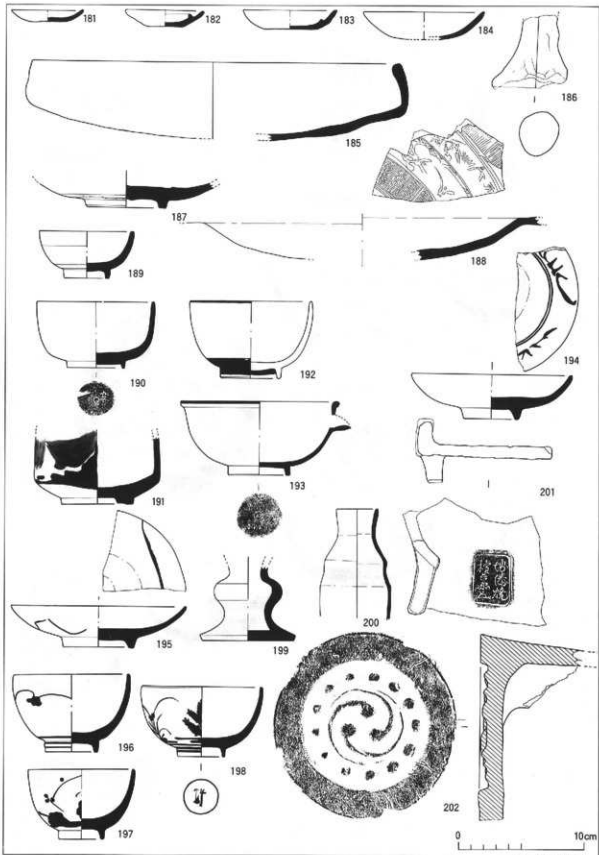


図20 第53次調査出土遺物実測図(1)

181~202 第3層

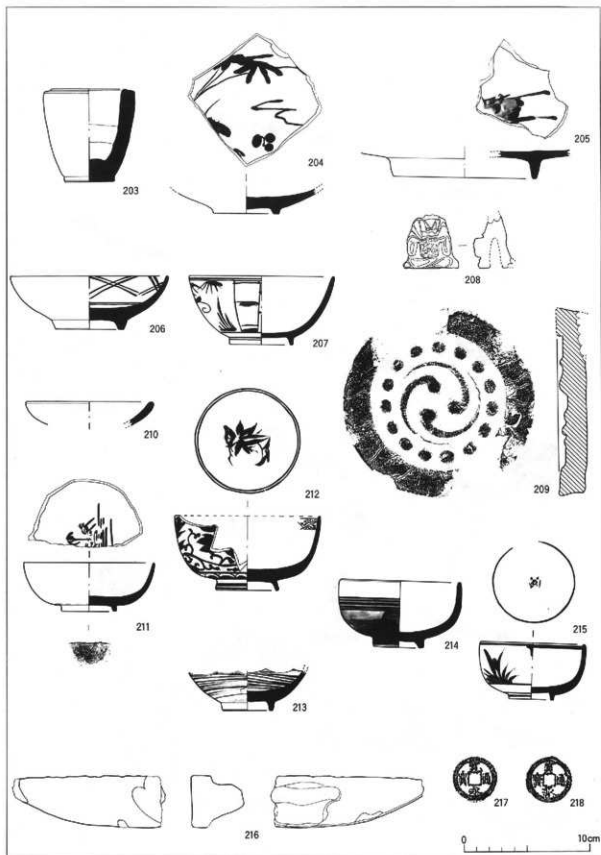


図21 第53次調査出土遺物実測図(1)

203～209 第4層, 210～214 南北セクション  
215～218 表層

番号	機種	法量	出土地点・備考	番号	機種	法量	出土地点・備考
Fig. 11-1 Pl. 11-1	焙烙	口径 29.2 器高 6.3	土坑13	Fig. 12-20 Pl.	土師皿	口径 9.8 器高 2.0	土坑23 手捏ね
Fig. 11-2 Pl. 11-2	土師皿	口径 16.0? 器高 2.3?	土坑16 手捏ね 口縁部に 煤付着	Fig. 12-21 Pl. 13-17	白磁坏	口径 7.2 器高 3.6 高台径 2.8	土坑23 壹付無軸
Fig. 11-3 Pl. 11-3	陶器蓋	蓋径 16.6 器高 3.5	土坑16 外 鉄軸	Fig. 12-22 Pl. 13-18	青磁染付碗 肥前	口径 10.8 器高 6.0 高台径 4.4	土坑23 内 斜格字文 銘款あり
Fig. 11-4 Pl. 11-4	染付磁器皿 肥前	口径 13.5 器高 3.1 高台径 5.0	土坑16 内 唐草文 蛇ノ目軸 ハギ 見込み 五弁花	Fig. 12-23 Pl. 13-19	軒平瓦	長 (9.8) 幅 3.8 厚 1.7	土坑23 内 唐草文
Fig. 11-5 Pl. 12-5	陶器皿 唐津系	口径 11.0 器高 3.1 高台径 4.2	土坑19 蛇ノ目軸ハギ 高台 無軸 内 青緑軸	Fig. 12-24 Pl. 13-20	軒平瓦	長 (2.9) 幅 4.6	土坑23 唐草文
Fig. 11-6 Pl. 12-7	陶器皿 唐津系	口径 9.7 器高 5.5 高台径 4.4	土坑19 蛇ノ目軸ハギ 高台 無軸 内 青緑軸	Fig. 12-25 Pl. 13-21	軒丸瓦	長 (8.5) 幅 (7.8) 厚 1.2	土坑23 三巴文 蛇ノ目軸 ハギ 高台無軸
Fig. 11-7 Pl. 12-7	染付磁器碗 肥前	口径 9.7 器高 5.5 高台径 4.4	土坑19 蛇ノ目軸ハギ 壹付無 軸 外 印科手(五弁花)	Fig. 12-26 Pl. 13-22	軒丸瓦	幅 13.5	土坑23 三巴文
Fig. 11-8 Pl. 12-8	陶器碗 京焼写し	口径 8.0 器高 6.0 高台径 5.4	土坑19 外 山水文 高台無軸 銘款あり	Fig. 12-27 Pl. 13-23	軒丸瓦	幅 (10.3)	土坑23 三巴文
Fig. 11-9 Pl. 12-9	陶器鉢 丹波	口径 22.0 器高 9.6 底径 13.6	土坑19	Fig. 13-28 Pl. 13-24	土師皿 (燈明皿)	口径 10.0 器高 1.8	土坑24 手捏ね 口縁部に 煤付着
Fig. 11-10 Pl.	陶器鉢 丹波	口径 19.4 残高 6.6	土坑19	Fig. 13-29 Pl. 13-25	土師皿 (燈明皿)	口径 5.5 器高 2.0	土坑24 口クロ成形 糸切り底 内 棒軸 口縁部に煤付着
Fig. 11-11 Pl. 12-11	染付磁器徳利 肥前	残高 22.9 高台径 8.3	土坑19	Fig. 13-30 Pl. 13-26	陶器碗 京焼写し	口径 9.5 器高 5.6 高台径 4.7	土坑24 樓閣山水文 高台無軸
Fig. 11-12 Pl. 12-12	鏡 銅製品	径 8.3 厚 0.4	土坑19 「藤原作」	Fig. 13-21 Pl. 13-27	染付磁器碗 肥前	口径 9.6 器高 3.9 底径 4.0	土坑24(火災層F3) 見込み 菊文 銘款あり「福」
Fig. 11-13 Pl. 12-10	銅製品	外径 2.4 内径 1.4 厚 0.4	土坑19	Fig. 13-32 Pl. 13-28	青磁染付筒 型碗 肥前	口径 8.2 器高 6.1 底径 4.2	土坑24 内 斜格字文 見込み 五弁花 壹付無軸
Fig. 12-14	平瓦	縦 27.2 横 27.8 厚 1.7	土坑19	Fig. 13-33 Pl. 13-29	染付磁器碗 肥前	口径 10.3 器高 5.7 高台径 4.2	土坑26 外 梅文
Fig. 12-15	土師皿 (燈明皿)	口径 11.2 残高 2.0	土坑20 手捏ね 口縁部に 煤付着	Fig. 13-24 Pl. 14-30	陶器鉢	口径 15.1 器高 6.0 高台径 5.8	土坑26 蛇ノ目ハギ 高台 無軸
Fig. 12-16 Pl. 12-13	陶器碗	残高 5.3 高台径 5.0	土坑21 軸軸 高台無軸	Fig. 13-35 Pl. 14-31	摺鉢 堺	口径 32.5 器高 12.4 高台径17.8	土坑26
Fig. 12-17 Pl. 12-14	陶器皿 唐津系	口径 13.8 器高 3.6 高台径 4.3	土坑21 蛇ノ目軸ハギ 内 青緑軸	Fig. 13-36 Pl. 14-32	陶器碗 唐津系	口径 11.0 器高 6.6 高台径 4.0	土坑29 外 青緑軸 高台 無軸
Fig. 12-18 Pl. 12-15	磁器碗	口径 11.6 器高 4.6 高台径 3.2	土坑21 内外型紙刷り	Fig. 13-37 Pl. 14-33	土師皿 (燈明皿)	口径 7.0 器高 1.5	土坑33 口クロ成形 糸切り 底 口縁部に煤付着
Fig. 12-19 Pl. 12-16	染付磁器碗 肥前	口径 11.5 器高 4.7 高台径 4.1	土坑22 蛇ノ目軸ハギ 草 花文	Fig. 13-38 Pl. 14-34	燈明皿 (土師質)	口径 8.8 器高 1.4	土坑33 口クロ成形 糸切り 底 棒軸

表2 第53次調査出土遺物観察表(1)

第2章 調査成果

番号	機種	法量	出土地点・備考	番号	機種	法量	出土地点・備考
Fig. 13-39 Pl. 14-35	燈明皿 (土師質)	口径 8.6 器高 1.1	土坑33 ロクロ成形 糸切り り底 柿軸	Fig. 14-58 Pl. 15-54	土師皿 (燈明皿)	口径 6.8 器高 1.4	土坑37 ロクロ成形 糸切り り底 口縁部に煤付着
Fig. 13-40 Pl. 14-36	土師皿	口径 10.0 器高 1.8	土坑33 手捏ね	Fig. 14-59 Pl. 15-55	土師皿 (燈明皿)	口径 7.0 器高 1.45	土坑37 ロクロ成形 糸切り り底 口縁部に煤付着
Fig. 13-41 Pl. 14-37	燈明皿 (土師質)	口径 8.7 器高 1.4	土坑33 ロクロ成形 糸切り り底 柿軸	Fig. 14-60 Pl. 15-56	陶器碗 唐津	口径 11.0 器高 4.8 高台径 3.8	土坑37 蛇ノ目軸ハギ 刷 毛目 畳付無軸
Fig. 13-42 Pl. 14-38	燈明皿 (土師質)	口径 5.9 器高 1.1	土坑33 ロクロ成形 糸切り り底 柿軸	Fig. 14-61 Pl. 16-57	軒丸瓦	幅 13.3	土坑38 三巴文
Fig. 13-43 Pl. 14-39	陶器蓋	蓋径 9.8 器高 1.9	土坑33 外 鉄軸	Fig. 14-62 Pl. 16-58	軒丸瓦	幅 14.4	土坑38 三巴文
Fig. 13-44 Pl. 14-40	白磁紅皿	口径 3.8 器高 1.4 高台径 1.5	土坑33 高台無軸	Fig. 14-63 Pl. 16-59	土師皿 (燈明皿)	口径 11.0 器高 2.0	土坑38 手捏ね 口縁部に 煤付着
Fig. 13-45 Pl. 14-41	塗付磁器碗 肥前	口径 10.4 器高 5.85 高台径 2.25	土坑33 外 梅文 畳付無 軸 銘款あり	Fig. 14-64 Pl. 16-60	土師皿	口径 10.6 器高 1.5	土坑39 手捏ね
Fig. 13-46 Pl. 14-42	行平	口径 14.3 器高 8.2 底径 5.6	土坑33 外 刻み目あり	Fig. 14-65 Pl. 16-61	土師皿	口径 10.8 器高 1.9	土坑39 手捏ね
Fig. 13-47 Pl. 14-43	陶器蓋	蓋径 14.8 器高 3.5	土坑33 外 花文	Fig. 14-66 Pl. 16-62	燈明皿 (土師質)	口径 7.8 器高 1.25	土坑39 ロクロ成形 糸切り り底 柿軸
Fig. 13-48 Pl. 15-44	陶器蓋	口径 16.8 器高 4.1	土坑33 外 花文 とびかん な	Fig. 14-67 Pl. 16-63	土師皿	口径 7.8 器高 1.3	土坑39 手捏ね
Fig. 13-49 Pl. 15-45	青磁塗付蓋	口径 6.6 器高 (2.5)	土坑33	Fig. 14-68 Pl. 16-64	土師皿	口径 7.6 器高 1.6	土坑39 手捏ね
Fig. 13-50 Pl. 15-46	陶器徳利	口径 2.0 器高 11.9	土坑33 外 鉄軸	Fig. 14-69 Pl. 16-65	土師皿	口径 7.6 器高 1.5	土坑39 手捏ね
Fig. 14-51 Pl. 15-47	瓦質火舎	口径 18.2 器高 9.3	土坑34	Fig. 14-70 Pl. 16-66	土師皿	口径 7.2 器高 1.2	土坑39 手捏ね
Fig. 14-52 Pl. 15-48	白磁皿 肥前	口径 9.3 器高 2.4 高台径 3.85	土坑36 蛇ノ目軸ハギ 高 台無軸	Fig. 14-71 Pl. 16-67	土師皿	口径 7.6 器高 1.5	土坑39 手捏ね
Fig. 14-53 Pl. 15-49	塗付磁器碗 肥前	口径 7.2 器高 5.6 高台径 4.1	土坑36 外 竹 竹の子文 銘款あり「福」	Fig. 14-72 Pl. 16-68	土師皿	口径 8.0 器高 1.7	土坑39 手捏ね
Fig. 14-54 Pl. 15-50	土師皿 (燈明皿)	口径 7.4 器高 1.5	土坑37 ロクロ成形 糸切り り底 口縁部に煤付着	Fig. 14-73 Pl.	土師皿	口径 8.4 器高 1.6	土坑39 手捏ね
Fig. 14-55 Pl. 15-51	土師皿 (燈明皿)	口径 6.8 器高 1.4	土坑37 ロクロ成形 糸切り り底 口縁部に煤付着	Fig. 14-24 Pl. 16-69	土師皿	口径 10.7 器高 1.8	土坑39 手捏ね
Fig. 14-56 Pl. 15-52	土師皿	口径 10.8 器高 1.7	土坑37 手捏ね	Fig. 14-75 Pl. 16-70	土師皿	口径 11.0 器高 1.8	土坑39 手捏ね
Fig. 14-57 Pl. 15-52	土師皿	口径 10.8 器高 1.7	土坑37 手捏ね	Fig. 14-76 Pl. 16-71	土師皿	口径 10.4 器高 2.0	土坑39 手捏ね

表3 第53次調査出土遺物観察表(2)

番号	機種	法量	出土地点・備考	番号	機種	法量	出土地点・備考
Fig. 14-77	土師皿	口径 11.4 器高 1.7	土坑39 手捏丸	Fig. 15-96 Pl. 18-89	染付磁器碗 肥前	口径 11.0 器高 6.4 高台径 4.8	土坑48 内 松竹梅文 外 竹文
Fig. 14-78 Pl. 16-72	陶器碗 瀬戸・美濃	口径 9.6 器高 5.7 高台径 4.3	土坑39 内 灰釉 外 灰釉 鉄軸	Fig. 15-97 Pl. 18-90	色絵磁器碗 肥前	口径 8.2 器高 3.9 高台径 2.9	土坑48 色絵 外 幾何文 内 草花文
Fig. 14-79 Pl. 16-73	陶器碗	口径 11.6 器高 4.6 高台径 4.4	土坑39 蛇ノ目軸ハギ 高台無軸	Fig. 15-98 Pl. 18-91	陶器筒型碗 瀬戸・美濃	口径 7.4 器高 5.3	土坑48 外 横編文(鉄軸)
Fig. 14-80 Pl. 17-74	陶器碗 唐津	口径 11.2 器高 4.1 高台径 3.4	土坑39 外 刷毛目	Fig. 15-99 Pl. 18-92	土人形 (面)	長 5.1 幅 3.7	土坑51
Fig. 14-81 Pl. 17-75	陶器皿	口径 21.4 器高 6.8 高台径 9.0	土坑39 蛇ノ目軸ハギ 高台無軸	Fig. 15-100 Pl. 18-93	土師皿 (燈明受皿)	口径 10.8 器高 2.1	土坑53 口ノ口成形 内 柿軸
Fig. 14-82 Pl. 17-76	白磁香油壺	残高 7.8	土坑39	Fig. 15-101 Pl. 18-94	陶器瓶 丹波	底径 8.6 残高 4.6	土坑53
Fig. 14-83 Pl. 17-77	土人形 (仏様)	残高 35.0	土坑39	Fig. 15-102 Pl. 18-95	陶器火入 丹波	口径 12.2 器高 5.2	土坑53
Fig. 15-84 Pl. 17-78	染付磁器蓋 肥前	口径 11.4 器高 2.7	土坑41 内 斜格子 松竹 梅文 外 竹文	Fig. 15-103 Pl. 18-96	青磁皿 肥前	口径 13.4 器高 3.8 高台径 7.0	土坑53 口縁
Fig. 15-85 Pl. 17-79	土人形 (天神)	残高 5.2	土坑41 底に孔あり	Fig. 15-104 Pl. 19-97	陶器壺 丹波	底径 7.8 残高 3.8	土坑53
Fig. 15-86 Pl. 17-80	染付磁器碗 肥前	口径 10.8 器高 5.2 高台径 4.8	土坑45 外 印判手(菊文)	Fig. 15-105 Pl. 19-98	陶器播鉢 堺	口径 27.8 器高 10.5 底径 12.5	土坑53
Fig. 15-87 Pl. 17-81	染付磁器碗 肥前	口径 10.8 器高 5.7 高台径 4.4	土坑45 外 笹竹文	Fig. 16-106 Pl. 19-99	染付磁器杯 肥前	口径 5.6 器高 2.2 底径 12.5	土坑53 外 草花文
Fig. 15-88 Pl. 17-82	陶器碗 京焼写し	口径 9.4 器高 5.7 高台径 3.0	土坑45 色絵 笹竹文 高台無軸	Fig. 16-107 Pl. 19-100	染付磁器碗 肥前	口径 11.3 器高 4.9 高台径 4.6	土坑53 蛇ノ目軸ハギ 外 梅文
Fig. 15-89 Pl. 17-83	白磁皿	口径 8.9 器高 2.6 高台径 3.4	土坑48 疊付無軸	Fig. 16-108 Pl. 19-101	染付磁器碗 肥前	口径 10.4 器高 5.6 高台径 4.6	土坑53 蛇ノ目軸ハギ 外 山水文
Fig. 15-90 Pl. 17-84	陶器蓋 瀬戸・美濃	口径 8.4 器高 1.8	土坑48 糸切り底	Fig. 16-109 Pl. 19-102	染付磁器碗 肥前	口径 10.6 器高 4.9 高台径 4.2	土坑53 内 蛇ノ目軸ハギ 外 梅文
Fig. 15-91	陶器鉢 丹波	口径 43.6 器高 7.6 底径 31.0	土坑48	Fig. 16-110 Pl. 19-103	磁器碗 肥前	口径 10.3 器高 5.7 高台径 4.6	土坑53 口縁 疊付無軸
Fig. 15-92 Pl. 17-85	染付磁器碗 肥前	口径 11.0 器高 5.9 高台径 4.7	土坑48 外 桐文 疊付無軸	Fig. 16-111 Pl. 19-104	染付磁器碗 肥前	口径 10.8 器高 5.5 高台径 4.1	土坑53 内 蛇ノ目軸ハギ 外 梅文
Fig. 15-93 Pl. 18-86	染付磁器碗 肥前	口径 10.1 器高 5.1 高台径 4.4	土坑48 見込み 五弁花 ノ角縁、鉢あり	Fig. 16-112 Pl. 19-105	染付磁器碗 肥前	口径 7.8 器高 4.2 高台径 3.1	土坑53 外 印判手
Fig. 15-94 Pl. 18-87	染付磁器碗 肥前	口径 11.0 器高 5.0 高台径 4.2	土坑48 内 蛇ノ目軸ハギ 外 梅文	Fig. 16-113 Pl. 19-106	染付磁器碗 肥前	口径 11.0 器高 4.5 高台径 4.4	土坑53 蛇ノ目軸ハギ 外 梅文
Fig. 15-95 Pl. 18-88	染付磁器碗 肥前	口径 8.8 器高 5.0 高台径 3.6	土坑48 外 丸文	Fig. 16-114 Pl. 20-107	染付磁器碗 肥前	口径 10.2 器高 5.3 高台径 4.2	土坑53 外 印判手(桐文) 鉢蓋あり

表4 第53次調査出土物観表(3)

## 第2章 調査成果

番号	機種	法量	出土地点・備考	番号	機種	法量	出土地点・備考
Fig. 16-115 Pl. 20-108	染付磁器碗 肥前	口径 10.0 器高 5.5 高台径 4.2	土坑53 外 梅文	Fig. 17-134 Pl. 21-127	陶器皿 唐津	口径 12.0 器高 3.8 底径 3.9	溝1 高台無軸 胎土目
Fig. 16-116 Pl. 20-109	染付磁器碗 肥前	口径 7.1 器高 3.6 高台径 2.8	土坑53 外 草花文	Fig. 17-135 Pl. 22-128	陶器碗 京焼写し	口径 10.4 器高 6.6 底径 5.0	溝1 高台無軸
Fig. 16-117	染付磁器皿 肥前	口径 10.4 器高 5.8 高台径 4.1	土坑53 外 梅文 鉢款あり	Fig. 17-136 Pl. 22-129	陶器碗 京焼写し	口径 10.4 器高 6.6 底径 4.4	溝1
Fig. 16-118 Pl. 20-112	染付磁器皿 肥前	口径 13.0 器高 3.7 高台径 4.2	土坑53 内 蛇ノ目軸ハギ 覆付無軸	Fig. 17-137 Pl. 22-130	陶器碗 唐津	口径 11.3 器高 5.8 底径 4.2	溝1 刷毛目 内 蛇ノ目 軸ハギ
Fig. 16-119 Pl. 20-113	染付磁器皿 肥前	口径 12.0 器高 3.9 高台径 4.4	土坑53 内 草花文 蛇ノ目 軸ハギ	Fig. 17-138 Pl. 22-131	陶器碗 京焼写し	口径 9.6 器高 6.0 底径 4.8	溝1 高台無軸
Fig. 16-120 Pl. 20-114	土師質花瓶	口径 6.4 器高 6.85 底径 5.3	土坑53 ロク口成形 糸切 り底	Fig. 17-139 Pl. 22-132	陶器碗 唐津	口径 11.0 器高 5.1 底径 3.7	溝1 刷毛目 内 蛇ノ目 軸ハギ
Fig. 16-121 Pl. 20-111	染付磁器香 油壺 肥前	口径 2.2 器高 7.5 底径 4.6	土坑53 外 草花文	Fig. 17-140 Pl. 22-133	陶器碗	口径 9.5 器高 7.0 底径 5.0	溝1
Fig. 16-122 Pl. 21-115	石製品	長 14.7 幅 6.0 厚 2.1	土坑53	Fig. 17-141 Pl. 22-134	陶器碗 唐津	残高 3.6 底径 4.0	溝1 刷毛目
Fig. 16-123 Pl. 21-116	軒丸瓦	長 (22.5) 幅 13.7 厚 2.1	土坑53 三巴文	Fig. 17-142 Pl. 22-135	陶器壺 井波	残高 14.6 底径 11.8	溝1
Fig. 16-124 Pl. 21-117	陶器人形	残高 3.7 底径 13.7	土坑57 表 緑軸	Fig. 17-143 Pl. 22-136	陶器鉢	残高 5.5 底径 4.2	溝1 高台無軸
Fig. 17-125 Pl. 21-118	土師皿	口径 10.5 器高 1.4	溝1 手捏ね	Fig. 18-144 Pl. 22-137	染付磁器碗	口径 6.2 器高 3.5 底径 3.0	溝1 外 型紙刷り
Fig. 17-126 Pl. 21-119	土師皿	口径 9.8 器高 1.5	溝1 手捏ね 底部に煤付着	Fig. 18-145 Pl. 22-138	白磁杯	口径 6.3 器高 4.0 底径 2.8	溝1 高台無軸
Fig. 17-127 Pl. 21-120	土師皿	口径 8.5 器高 2.05	溝1 手捏ね	Fig. 18-146 Pl. 23-139	染付磁器碗 肥前	口径 10.9 器高 (4.0)	溝1 印判文(井指と菊文)
Fig. 17-128 Pl. 21-121	土師皿	口径 9.6 器高 1.5	溝1 手捏ね	Fig. 18-147 Pl. 23-140	染付磁器碗 肥前	口径 10.5 器高 5.6 底径 3.6	溝1
Fig. 17-129 Pl. 21-122	焙焼	口径 30.0 器高 7.4	溝1	Fig. 18-148 Pl. 23-141	染付磁器碗 肥前	口径 10.0 器高 5.3 底径 4.0	溝1 外 草花文
Fig. 17-130 Pl. 21-123	焙焼	口径 25.4 器高 6.9	溝1	Fig. 18-149 Pl. 23-142	磁器碗 京焼写し	口径 9.5 器高 5.5 底径 5.2	溝1 山水文 高台無軸
Fig. 17-131 Pl. 21-124	焙焼	口径 25.4 器高 5.4	溝1	Fig. 18-150 Pl. 23-143	陶器鉢	口径 19.8 器高 9.0 底径 7.2	溝1 内 菊菊文 高台無軸
Fig. 17-132 Pl. 21-125	陶器火入 丹波	口径 10.0 器高 6.3	溝1	Fig. 18-151 Pl. 23-144	染付磁器皿 肥前	口径 14.5 器高 3.1 底径 8.6	溝1 内 草花文 外 印判文
Fig. 17-133 Pl. 21-126	白磁皿	口径 19.2 器高 3.5 底径 6.6	溝1	Fig. 18-152	陶器徳利 井波	口径 2.6 残高 8.0	溝1

表5 第53次調査出土遺物観察表(4)

番号	機種	法量	出土地点・備考	番号	機種	法量	出土地点・備考
Fig. 18-153	磁器香油壺 肥前	残高 6.8 胴径 9.6	溝1	Fig. 19-172 Pl. 25-162	染付磁器碗 肥前	口径 7.2 器高 2.7 高台径 3.3	表土 外 文様有り
Fig. 18-154 Pl. 23-145	陶器	幅 3.8 器高 0.9	溝1	Fig. 19-173 Pl. 25-163	染付磁器皿 肥前	口径 9.4 器高 2.7 高台径 2.6	表土 内 斜格子文
Fig. 18-155 Pl.	土師貫十能	残高 9.7	溝1	Fig. 19-174 Pl. 25-164	染付磁器皿 肥前	口径 13.4 器高 2.65 高台径 9.0	表土 内 鳥文(横) 外 井桁文
Fig. 18-156 Pl. 23-146	土人形(鳥)	残高 4.3	溝1 頸部欠損	Fig. 19-175 Pl. 25-165	色絵磁器碗 肥前	口径 5.4 器高 4.5 高台径 4.0	表土 焼継の痕あり
Fig. 18-157 Pl. 23-147	陶器徳利	底径 7.2 残高 20.2	溝1	Fig. 19-176 Pl. 25-166	染付磁器碗 肥前	口径 5.4 器高 4.5 高台径 4.6	表土 印判手(菊文)
Fig. 18-158 Pl. 23-148	銅製品 柄杓	残長 14.8(合柄) 径、履10.2 横 8.9 高さ 3.5	溝1	Fig. 19-177 Pl. 25-167	染付磁器碗 肥前	口径 10.5 器高 5.2 高台径 4.0	表土 外 梅文
Fig. 18-159 Pl. 24-149	一石五輪唐	残高 24.8	溝1	Fig. 19-178 Pl. 25-168	染付磁器碗 肥前	口径 10.8 器高 6.7 高台径 4.6	表土 内 斜格子文 外 牡丹文
Fig. 19-160 Pl. 24-150	軒丸瓦	幅 15.0 厚 2.0	溝1 三巴文	Fig. 19-179 Pl. 25-169	陶器火入 丹波	残高 3.3 底径 7.8	表土
Fig. 19-161 Pl. 24-151	軒丸瓦	幅 14.2 厚 2.3	溝1 三巴文	Fig. 19-180 Pl. 25-170	染付磁器徳利 肥前	残高 8.7 高台径 3.4	表土 外 唐草文
Fig. 19-162 Pl. 24-152	土師皿 (燈明皿)		溝状遺構 手裡ね 口縁部に煤付着	Fig. 20-181 Pl. 25-171	土師皿 (燈明受皿)	口径 5.5 器高 0.9	第3層 口クロ成形 糸切り底 棹軸 口縁部に煤付着
Fig. 19-163 Pl. 24-153	陶器燗鉢	口径 26.2 器高 11.6 高台径12.0	溝状遺構	Fig. 20-182 Pl. 26-172	土師皿 (燈明受皿)	口径 6.0 器高 1.3	第3層 口クロ成形 糸切り底 棹軸 口縁部に煤付着
Fig. 19-164 Pl. 24-154	土師皿 (燈明受皿)	口径 7.6 器高 1.6	井戸1 口クロ成形 糸切 り底 内 棹軸	Fig. 20-183 Pl. 26-173	土師皿 (燈明受皿)	口径 7.2 器高 1.5	第3層 口クロ成形 糸切り底 棹軸 口縁部に煤付着
Fig. 19-165 Pl. 24-155	陶器碗 瀬戸・美濃	口径 5.4 器高 5.35 高台径 3.4	井戸1 外 鉄軸 灰軸	Fig. 20-184	土師皿 (燈明皿)	口径 9.6 器高 2.2	第3層 手裡ね 口縁部に煤付着
Fig. 19-166 Pl. 24-156	染付磁器碗 肥前	口径 8.8 器高 5.35 底径 4.6	井戸1 外 梅文	Fig. 20-185 Pl. 26-174	焙烙	口径 29.4 器高 6.2	第3層
Fig. 19-167 Pl. 24-157	染付磁器碗 肥前	口径 8.6 器高 5.95 底径 4.4	井戸1 外 松竹梅文	Fig. 20-186 Pl. 26-175	土製支脚?	残高 5.8 径 3.5	第3層 脚部
Fig. 19-168 Pl. 24-158	土師皿	口径 6.2 器高 1.55 高台径 3.2	表土 口クロ成形	Fig. 20-187 Pl. 26-176	陶器皿 唐津系	口径 6.6 器高 3.1 高台径 4.4	第3層 杓ノ目輪ハギ 灰軸 高台無軸
Fig. 19-169 Pl. 24-159	陶器小坏	口径 3.2 器高 3.4 底径 2.7	表土	Fig. 20-188 Pl. 26-177	陶器皿 唐津		第3層 三鳥手
Fig. 19-170 Pl. 25-160	染付磁器小坏 肥前	口径 4.6 器高 4.2 高台径 2.8	表土	Fig. 20-189 Pl. 26-178	陶器碗 瀬戸・美濃	口径 9.2 器高 5.6 高台径 3.8	第3層 内外 黄瀬戸軸 高台無軸
Fig. 19-171 Pl. 25-161	白磁紅皿	口径 4.5 器高 1.6 高台径 2.0	表土 高台無軸	Fig. 20-190 Pl. 26-179	陶器碗 京焼写し	口径 9.0 器高 5.3 高台径 4.6	第3層 外 山水文 高台無 軸 「小松吉」銘あり

表6 第53次調査出土遺物観察表(5)

## 第2章 調査成果

番号	機種	法量	出土地点・備考	番号	機種	法量	出土地点・備考
Fig. 20-191 Pl. 26-180	陶器香炉 唐津	残高 5.3 高台径 5.6	第3層 外 刷毛目	Fig. 21-206 Pl. 28-195	染付磁器皿 肥前	口径 12.4 器高 4.3 高台径 5.4	第4層 内 斜行線文 蛇ノ目輪ハギ
Fig. 20-192 Pl. 26-181	陶器碗	口径 9.6 残高 6.2	第3層 口縁 高台無軸	Fig. 21-207 Pl. 28-196	染付磁器碗 肥前	口径 11.4 器高 5.5	第4層 外 草花文
Fig. 20-193 Pl. 26-182	陶器片口鉢 京焼写し	口径 12.0 器高 5.9 高台径 5.0	第3層 口縁 高台無軸 「新」銘あり	Fig. 21-208 Pl. 28-197	土人形 (僧侶)	残高 4.3 幅 4.2	第4層 底に孔あり
Fig. 20-194 Pl. 26-183	染付磁器皿 肥前	口径 6.6 器高 3.6 高台径 4.4	第3層 内 草花文 蛇ノ目輪ハギ	Fig. 21-209 Pl. 28-198	軒丸瓦	幅 (15.0) 厚 2.0	第4層 二巴文
Fig. 20-195 Pl. 26-184	染付磁器皿 肥前	口径 13.8 器高 3.3 高台径 5.6	第3層 蛇ノ目輪ハギ 高台無軸	Fig. 21-210 Pl. 28-199	土師皿 (燈明皿)	口径 10.2 器高 1.8	南北セクション 手摺ね 口縁部に煤付着
Fig. 20-196 Pl. 27-185	染付磁器碗 肥前	口径 9.0 器高 6.2 高台径 4.0	第3層 外 蔓草文	Fig. 21-211 Pl. 28-200	陶器碗 京焼写し	口径 10.2 器高 3.9	南北セクション 内 樓閣山水文
Fig. 20-197 Pl. 27-186	染付磁器碗 肥前	口径 9.2 器高 5.6 高台径 3.8	第3層 外 印判文 草花文 「大明年製」銘あり	Fig. 21-212 Pl. 28-201	染付磁器碗 肥前	口径 11.5 器高 5.95 高台径 5.0	南北セクション 内 斜格子文 外 唐草文
Fig. 20-199 Pl. 27-188	花生	残高 6.0 底径 7.2	第3層 口口成形 糸切 り底 柿種	Fig. 21-213 Pl. 28-202	陶器碗 唐津	残高 3.2 高台径 4.2	南北セクション 刷毛目 蛇ノ目輪ハギ
Fig. 20-200 Pl. 27-189	陶器徳利	口径 3.2 残高 8.7	第3層	Fig. 21-214 Pl. 29-203	陶器碗 瀬戸・美濃	口径 3.4 器高 5.3 高台径 4.0	南北セクション
Fig. 20-201 Pl. 27-190	風炉	器高 5.0	第3層 「増廣焼」銘あり	Fig. 21-215 Pl. 29-204	染付磁器碗 肥前	口径 8.2 器高 4.5 高台径 3.5	表探
Fig. 20-202 Pl. 27-191	軒丸瓦	長 (8.0) 幅 14.9 厚 1.8	第3層 二巴文	Fig. 21-216 Pl. 29-205	瓦	長 (12.2) 幅 4.2 高 4.2	表探
Fig. 21-203 Pl. 27-192	焼塩壺	口径 7.2 器高 7.4 底径 4.0	第4層	Fig. 21-217 Pl. 29-206	銅銭	径 2.4	表探 寛永通宝
Fig. 21-204 Pl. 28-194	染付磁器皿 肥前	残高 2.0 高台径 5.2	第4層 草花文	Fig. 21-218 Pl. 29-206	銅銭	径 2.4	表探 寛永通宝
Fig. 21-205 Pl. 27-193	陶器皿	残高 2.4 高台径 11.4	第4層 山水文				

表7 第53次調査出土遺物観察表(6)



### 第3節 第56次調査

所在地 伊丹市宮ノ前3丁目5-14

調査面積 27㎡

調査期間 昭和62年11月14日～11月19日

#### 調査概要

今回の調査は店舗付住宅建設に伴い、国庫補助事業として実施した。

当地点は、有岡城跡岸ノ碁跡に推定されている猪名野神社境内の隣接地である。猪名野神社境内には今でも土塁と堀が残っており、当時の碁の施設と考えられている。これまでに、第25次調査において堀底から乱杭などが発見されている。しかし、碁内の建物跡などは未調査となっている。今回の調査は碁の範囲（南側）の点を確認するための調査で、何等かの資料が得られるのではないかと期待されていたのである。

#### 調査成果

##### 遺構

調査の結果、土坑17基などが検出されたが、有岡城期に遡るものではなく、すべて江戸後期以降の所産である。

##### 遺物

1・3・4は土坑11出土。すべて肥前の染付草花文碗である。2は柱穴3より出土した肥前染付草花文碗。

##### 小 結

今回の調査範囲は狭く、岸の碁関係の遺構は検出できなかった。当地点が岸の碁の範囲外であったかは今後の調査によって明らかにしていきたい。



図22 第56次調査地点図(1/5,000)

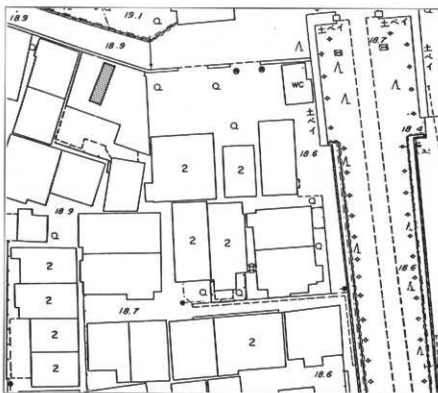


図23 調査区設定図(1/500)

第2章 調査成果

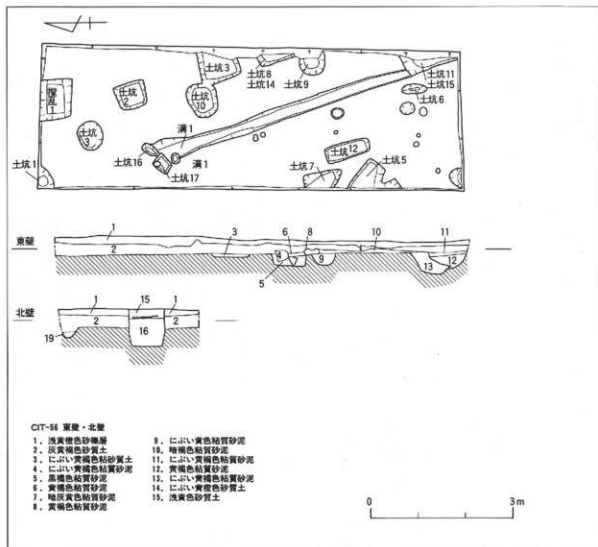


図24 第56次調査遺構実測図

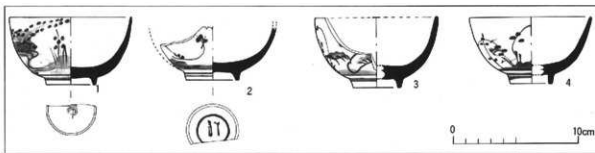


図25 第56次調査出土遺物実測図

番号	機種	法量	出土地点・備考	番号	機種	法量	出土地点・備考
Fig. 25-1	染付磁器碗	口径 9.8	土坑11	Fig. 25-3	染付磁器碗	口径 9.8	土坑11
Pl. 29-1	肥前	器高 5.4	外 草花文	Pl. 29-3	肥前	器高 5.6	外 草花文
		底径 4.0	銘款あり			底径 3.8	
Fig. 25-2	染付磁器碗	口径	柱穴3	Fig. 25-4	染付磁器碗	口径 4.8	土坑11
Pl. 29-2	肥前	器高 14.2	外 草花文	Pl. 29-4	肥前	器高 5.3	外 草花文
		底径 4.2	銘款あり			底径 3.4	

表 8 第53次調査出土遺物観察表(7)

## 第4節 第58次調査

所在地 伊丹市中央3丁目340番地

調査面積 80㎡

調査期間 昭和63年1月18日～1月31日

## 調査概要

今回の調査は、市道拡幅事業による医院の建替え工事に伴い実施した。本地点の北側は本書所載の第53次調査地点である。

江戸時代の本地点は昆陽口村に属し、敷地の東側は井筒町、一軒（第53次調査地点）において北側は米屋町となっている。

当地点は、間口が狭く奥の長い敷地となっており、調査区もこの敷地に合わせて東西に長く設定した。その範囲は南北4m、東西20mである。調査は先ず表土の掘削から始め、礎石と焼土の広がりを確認した地表面下30cm

のところを第1遺構面とし、それ以下層毎に掘り下げ作業を止め、記録を採りながら調査を進めていった。結果的に最終の地山面までに4面の遺構面を検出している。

## 調査結果

調査の結果、第1面には建物跡（礎石列）と土坑、第2面には火災時に生じた炭化物や焼土を埋め込んだ土坑（土坑46）の他に多数の土坑を検出し、第3面では溝と土坑、第4面では有岡城と関係すると思われる堀跡を検出した。

また第1面と第2面には焼けたと見られる焼土面と焼土層が認められ、当地点が2度の火災に見舞われたことが判明した。



図26 第58次調査地点図(1/5,000)



図27 調査区設定図(1/500)

## 層 序

第58次調査地点の層序は複雑で、建物の建てられていた道側（西側）と裏庭にあたる東側では同一層が続いてこない。このことは、火災によると見られる焼土層が建物の存在した道側に厚く形成され、敷地奥ではほとんど堆積していないことでも言える。そのため調査に際しては、調査区内の基本層序を二度の焼土層と遺構検出面を参考に掘り下げを行なった。遺物の項で用いた遺物取り上げの際に付した土層名が、図29の上層図に付した土層番号と一致しないのはこのためである。遺物取り上げの際付した土層名について遺構面との関係を説明すると、第2次焼土層は第1遺構面上の堆積層で、第1次焼土層は第2遺構面上の堆積層、第6層は第3遺構面上の堆積層、そして第7層と第8層は第4遺構面土の堆積層である。

## 遺 構

第58次調査検出の遺構は、礎石建物跡や堀跡など多数に及んでいるが、紙面の関係ですべてに説明を加えることができない。そのため、各遺構面の主要な遺構を取り上げて検討したい。

（第1遺構面） 調査区の中央部から西側にかけて大型の礎石が一行並んでいる。この礎石列は、礎石2、礎石3、礎石5、から構成され、その間隔は礎石2と3の間で3m、礎石3と5の間で3.7mである。以上の礎石から当時の建物の復元してみたい。調査範囲は、幅約6m（南北）奥行約23m（東西）の敷地の中央部に幅4m、長さ20mの規模で設定したもので、その調査範囲の中央部に礎石が並ぶことから、間口は礎石列を中心として南北に各々3m（1間半）となるとみられ、奥行は、礎石2から西側の道路までが約3mあることから奥行は9.7mに近い数値となると考えられる。従って残礎から検討すると、間口3間（約6m）奥行5間（9.7m）程度の建物であったと考えられる。

（第2遺構面） 第2遺構面は火災に見舞われており、調査区の西側には焼土と炭の層が形成されていた。また火災後の焼土や炭化物を集めた土坑（土坑46）が道路際に掘られている。土坑46は長さ4m以上・幅3.6m以上・深さ20～25cmの規模で内部は炭化物と焼けた壁土が埋められていた。伊丹郷町では元禄時代以降に大火が度々起って、多数の家屋が焼失しているが、このような火事跡には土坑46のような炭化物などを埋設した土坑が多く認められている。

（第3遺構面） 第3遺構面では目立った遺構は認められず、この時期に建物が立てられていたという積極的な根拠はなく、溝1など遺物を出土する遺構が若干認められる程度である。

（第4遺構面） 第4遺構面では、調査区中央部を南北に延びる堀を検出した。この堀は幅、3.5m・深1.26mで延長3.6mにわたって検出した。堀の方向は西側の道路と平行しており、この道路との距離は12mである。今回の調査地点の北側で実施した第53次調査地点では上層部のみ調査に留っており、堀の確認まで掘り下げて調査を行っていないので、今回検出した堀の延長部は検出されていない。

有岡城惣構のなかではこのような規模の堀が各所で発見されている。しかし、これまで検出した堀は侍町がほとんどで、皆に関するものと考えられる第32次調査以外では町屋の範囲で見つかったのは今回が初めてとなる。今後の調査で、この堀の延長部が検出されれば、町屋域の中での防衛機能を解明する手掛かりとなる。

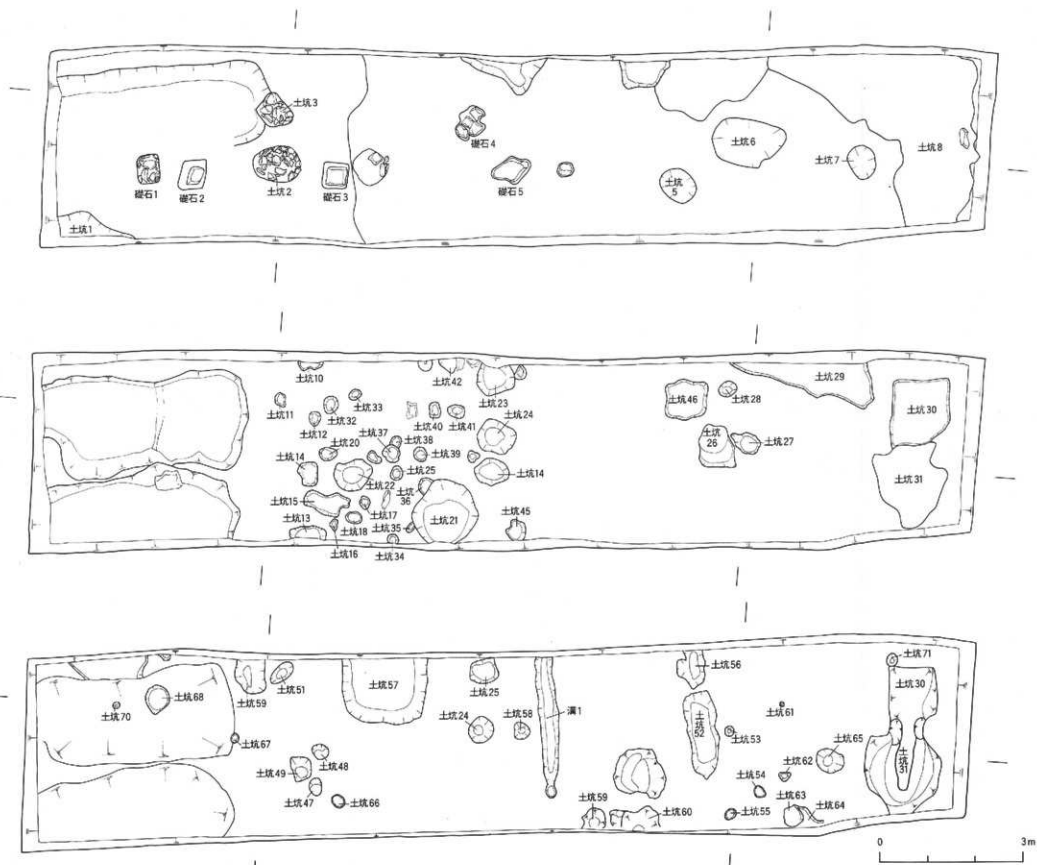


图28 第58次調查遺構測圖(1)



## 遺物

今回の調査で出土した遺物のうち95点を図示している。以下、遺構別に説明をしたい。

**土坑3(1-10)** 1-4は手捏ね製の土師皿である。いずれも口縁部に煤の付着が認められ燈明皿として使用されたことが判る。このうち1-3は、偏平な底部から緩やかに立ち上がる口縁部を有している。4は薄手で、丸味の底部から大きく開く口縁部を有している。5は京焼写しの陶器碗。腰部が強張り、口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部には、鉄軸と長石軸により篋文が描かれている。6は唐津焼系の刷毛目文陶器碗。7は白磁染付碗。内外面に印判文が描かれている。8-10は染付碗。8は花文が印判技法により描かれ、その他は手書きにより描かれている。9は柳文、10は笹竹文が描かれている。10は8と同様に手書きと印判の組み合わせにより文様が描かれている。

**土坑5(11-12)** 11は胎土目を残す絵唐津の皿である。12は白磁皿。釉調は青味があり青磁釉に近い発色となる。高台は露胎で、見込みは蛇ノ目軸刺しが施されている。

**土坑8(13)** 13は染付皿。見込みに五弁花、内面には斜行線文が描かれる。

**土坑11(14)** 14は寛永通宝。無背である。

**土坑12(15-17)** 15-17は柿軸を施した燈明皿。15は内面に段を有する受皿型である。

**土坑19(18-19)** 18は深みのある手捏ね製の土師皿。19は染付碗。釉調は青味が強い。

**土坑21(20-25)** 20は陶器の徳利。外面には厚く鉄軸がかけられている。21は陶器碗。内外に灰軸が施されている。高台裏は深く削り込まれ、呉器手碗の形態を呈する。22は唐津焼系陶器碗。23-25は染付碗。24は綱目文、25は山水文が描かれている。25の高台裏には「大明年製」の銘款がある。

**土坑30(26-33)** 26は灰軸を施したい小型の壺。瀬戸・美濃焼と考えられる。27は青磁染付鉢。外面の青磁釉は厚く施されている。28-30は染付碗。28と29は梅樹文、30は松竹梅文が描かれている。31は青磁碗。内面は蛇ノ目軸刺しが施されている。32は紅皿。33は印判手の染付碗。文様は井桁文の中に花文を配している。

**土坑31(34-40)** 34は柿軸燈明皿。35は焼壇壺。銘は無い。36は染付皿。内面一面に梅竹梅文が描かれている。37は青磁染付の小碗。見込みには、二重の圏線の中に五弁花が配されている。38は仏飯具。39と40は染付碗。

**土坑55(41)** 41は染付綱目文碗。

**土坑57(42)** 42は備前焼の甕。口縁部のみ出土。口縁部は玉縁状に張り出し、数条の凹線が巡っている。

**溝1(43)** 43は陶器碗。高台は露胎となる。

**第2次火災層出土(44-47)** 第2次火災層は調査区の西側において検出され、調査区の東側ではその跡は認められなかった。次に説明する遺物は、この火災を受けた生活面より出土したものである。44は手捏ね製の土師皿。45は陶器筒型碗。口縁部内面と外面には緑色に発色した灰軸が掛けられている。高台は3箇所を深くえぐった割高台となる。内面を施釉していないので、香炉の可能性がある。46は寛永通宝。47は磁石である。

**第4層出土(48-56)** 48は染付二重綱目文碗。見込みには花文が描かれている。49は染付杯。薄手で呉須の発色も良く優品である。50は外面に青磁釉を施した仏飯具。51は両端に敲打痕の残る石製品。52-54は寛永通宝。55と56は型あわせの土人形、55は大黒、56は人の乗った舟を型取っている。

**第1次火災層出土(57-83)** 57は柿軸燈明皿。58はロクロ成形の土師皿。底部は平坦で、口縁部は

内湾しながら立ち上がる。59は白磁の紅皿。舟型を呈し、外面は花卉状の型押しとなっている。60は唐津焼の砂目皿。62は唐津焼系の刷毛目碗。赤褐色の地肌長石釉による刷毛目文が描かれる。61は陶器碗。全面に灰釉が掛けられている。63は陶器皿。高台は深く削り込まれている。65の陶器壺は、64の蓋を伴って出土した。65は蓋を受けるある壺で、外面には黒褐色に発色した鉄釉の上から、灰釉を掛け流している。また胴部には墨書きがある。文字は「こや」と「やゝ」と書かれているが、これはこの地点の地名であった「昆陽口村」の「こや」のことであろう。64の蓋には厚く鉛釉が施されている。66は耳付甕である。外面には丹波焼特有の赤土部釉が施されている。67、68は丹波焼きの播鉢。ともに口縁部が発達した段階のもので、体部外面には指押しえ痕は認められず、ロクロ目が残る。播鉢は7条1単位となっている。69～72は染付碗。69は染付蝶文碗。70と71は染付花文碗。72は内外面に唐草文を描いている。これらの内、69・71・72は2次的に強い熱を受けて器面の釉が溶けだしている。これは、火災によるものと考えられる。73と74は同じ種類の染付皿。内面の縁文様には墨はじき技法による文様が描かれ、見込みには五弁花が配されている。75は仏飯具。脚部に比して碗部がやや大きく、底部は内ぐりが深く高台状を呈している。76は染付蓋。外面は唐草文が描かれる。77は染付草花文德利。底部は深く削り込んで高台を成している。78は大きめの德利。畳付に離れ砂が付着する。79は染付香油壺。80は寛永通宝。81と82は三巴文軒丸瓦である。83は石臼。

第6層出土(84～89) 84は陶器の甕。口縁部は短く立ち上がった後強く外反している。胴部の最大径は強く出っ張った肩部にある。無釉の焼締め陶器である。85は染付網目文碗。釉調は全体に青味が強く、畳付に離れ砂が付着している。86～89は寛永通宝。いずれも古寛永に属する。

第7層出土(90～92) 90は手捏ぬ製の土師皿。91は天目碗。口縁部は小さく外反し、体部は直線的となる。瀬戸・美濃焼。92は二彩唐津の皿。内面には砂目跡が残る。

第8層出土(93～95) 93は手捏ぬ製の土師皿。94は陶器の鉢の底部。内外面に鉄釉が施される。胎土は黄色味のある白色を呈し、瀬戸・美濃焼と考えられる。95は備前焼の甕。胴部の上半にあたる所に「へう記号」がある。

## 小 結

第58次調査地点は、第2節で報告した第53次調査地点の南に隣接する土地である。第53次調査と異なり、最下層までの調査を行なった。

当地点には、調査を開始する前に古い町屋が残り医院として利用されていた。写真図版PL-2bの右側に写っている建物がそれである。この建物の建築学的な調査は実施されていないので建築年代は明らかではないが、江戸期の建築であったという可能性もあろう。発掘調査は、この建物を解体した後、さらに数10cm掘り下げて第1遺構面を検出した。そして最下層の地山面上において、有岡城当時の堀跡を検出するまで計4枚の遺構面を検出したのである。

第1遺構面では、比較的大型礎石で構成される建物跡を検出した。調査範囲が狭いため礎石の並びは1列しか検出できていない。この面の時期は、同一遺構面上で検出された土坑(土坑3、土坑5、土坑8)より出土した遺物から18世紀前半頃と考えられよう。

第2遺構面では建物跡は検出されていない。この遺構面からは、焼土層及び火災後の焼けた壁土などを埋め込んだ焼土土坑が検出された。この焼土土坑は調査区の西端、道に面した所に位置している。第2遺構面の時期は、この遺構面で検出された土坑9～46の出土遺物及び焼土層出土遺物(57～83)から検討すると、17世紀後半～18世紀前半頃と考えられる。第2遺構面の最終時期を火災を受けた時



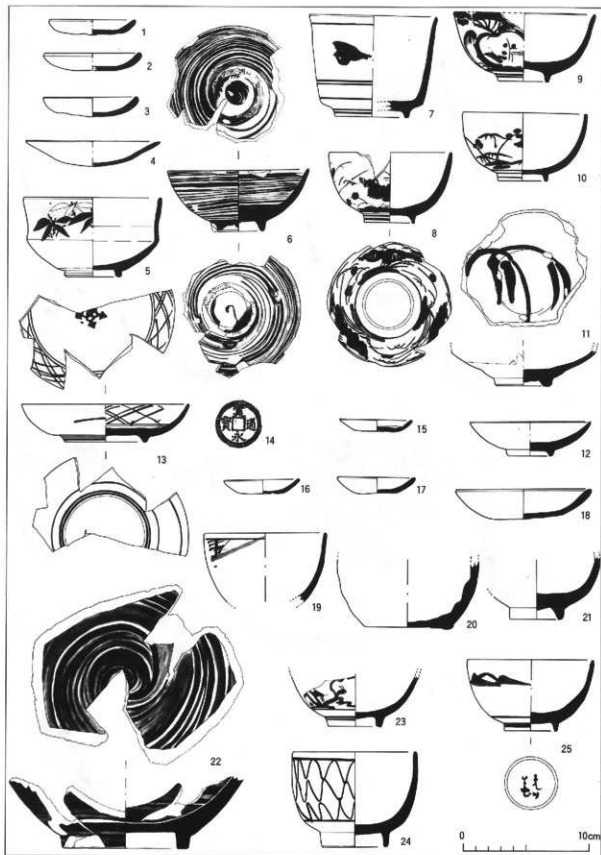


图30 第58次調査出土遺物実測図(1)

1~10 土坑3、11~12 土坑5、13 土坑8  
 14 土坑11、15~17 土坑12、18~19 土坑19  
 20~25 土坑21

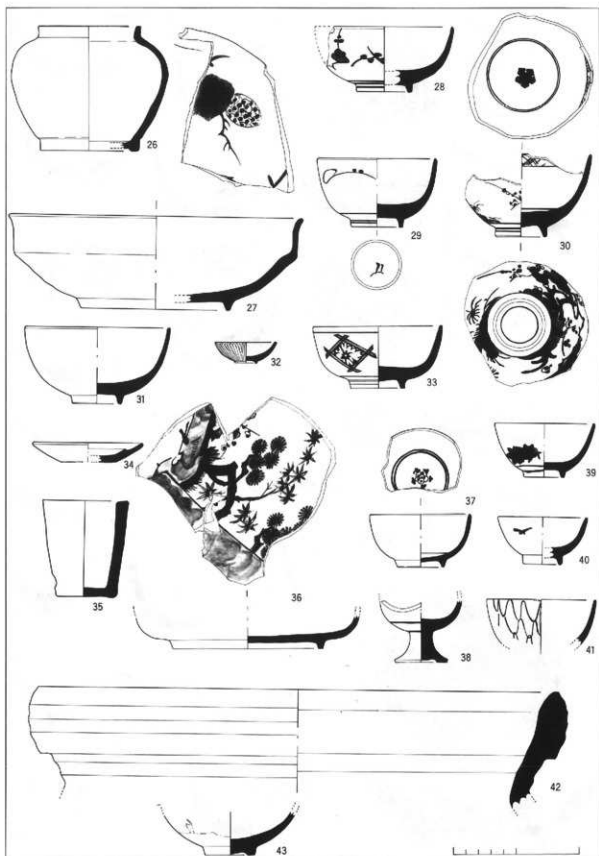


図31 第58次調査出土遺物実測図(2)

26~33 土坑30, 34~40 土坑31  
41 土坑55, 42 土坑57, 43 溝1

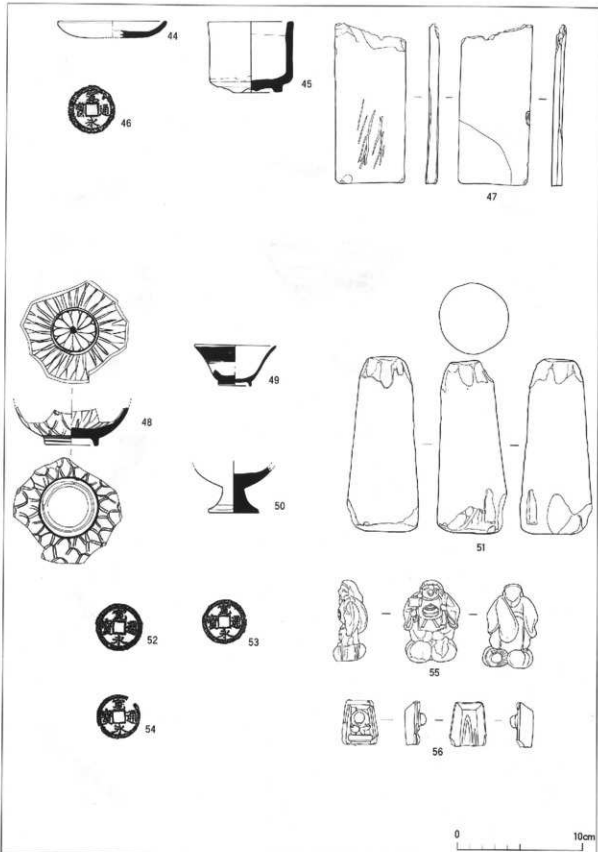


図32 第58次調査出土遺物実測図(3)

44~47 第2次焼土層, 48~56 第4層

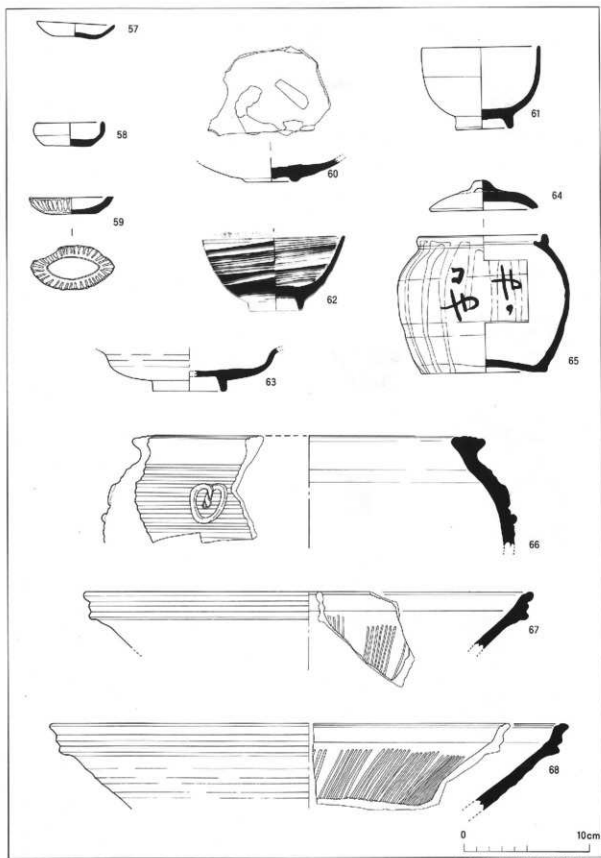


図33 第58次調査出土遺物実測図(4)

57~68 第1次焼土層(第5層)

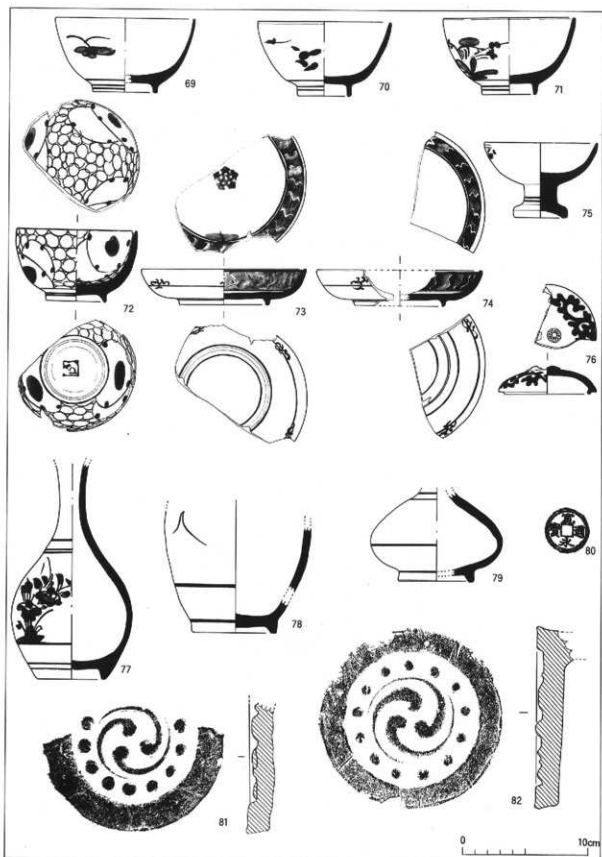


図34 第58次調査出土遺物実測図(5)

69~82 第1次焼土層(第5層)

## 第2章 調査成果

期と考えると、唐津焼系の刷毛目碗(62)、丹波焼の描鉢(67、68)、墨はじき技法による染付を施した肥前産の染付皿などからみて18世紀前半を降らないと考えられる。

伊丹郷町における記録に残る火災をみると、元禄元年(1688)、同十二年(1699)、同十五年(1702)、享保十四年(1729)の4回が確認できる。このうち、当地点に火事が及んだ可能性のあるものは、当地点の所在する昆陽口村の東側にあった井前町より出火し160軒が焼失した同元年の火事と、中少路村より出火し439軒が焼失した同十五年の火事である。时期的にみると、当地点の北方北少路村より出火した享保十四年の火事であった可能性もあり、今後さらに検討を要する。

第3遺構面には土坑などの遺構が少なく、建物跡も検出されなかった。この遺構面の時期は、第6層中より出土した遺物(84~89)と土坑55と57、溝1から出土した遺物からみて17世紀中頃~後半の時期が求められよう。

第4遺構面からは、南北に延びる堀跡を検出した。この堀跡は幅3.5m、深さ1.26mの小規模なもので、主郭部周辺から検出されている堀跡と共通した特徴を有している。有間城は惣構の城であったことが言われているが、当時の町場からも堀跡が検出されたことから、惣構の内部を知る上でも今回の発見は貴重な資料となろう。今後の調査でこの堀の延長部を追究していきたい。

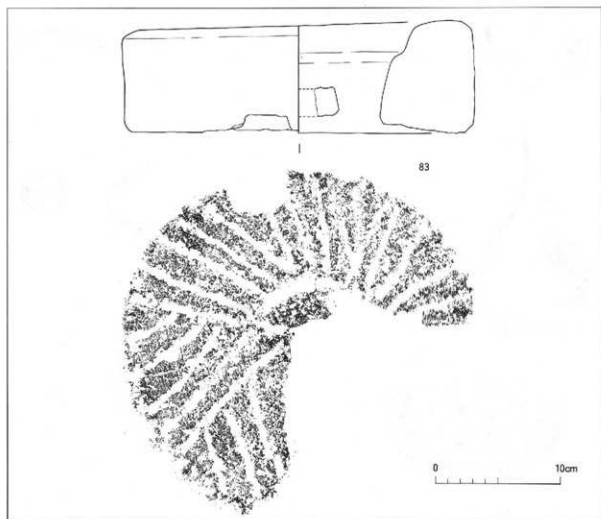


図35 第58次調査出土遺物実測図(6)

83 第1次焼土層(第5層)

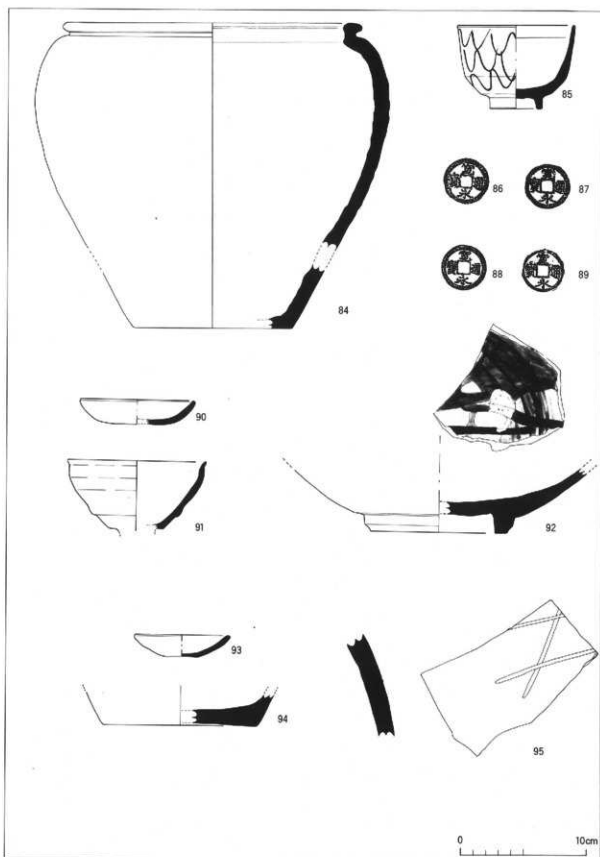


図36 第58次調査出土遺物実測図(7)

84・86～89 第6層。85 第6層直上  
91～93 第7層 94～95 第8層直上

第2章 調査成果

番号	機種	法量	出土地点・備考	番号	機種	法量	出土地点・備考
Fig. 30-1 Pl. 29-1	土師皿	口径 7.0 器高 1.2	土坑2 手捏ね	Fig. 30-20 Pl. 30-19	陶器徳利	口径 (13.0) 器高 (5.4)	土坑21 外 鉄軸 船軸
Fig. 30-2 Pl. 29-2	土師皿 (燈明皿)	口径 7.8 器高 1.4	土坑3 手捏ね	Fig. 30-21 Pl. 31-20	磁器碗 唐津	口径 (10.0) 器高 (4.8) 底径 4.2	土坑21 内外 灰軸
Fig. 30-3 Pl. 29-3	土師皿 (燈明皿)	口径 7.5 器高 1.7	土坑3 手捏ね	Fig. 30-22 Pl. 31-21	陶器鉢 唐津	口径 (18.7) 器高 (5.8) 底径 10.2	土坑21 刷毛目
Fig. 30-4 Pl. 29-4	土師皿 (燈明皿)	口径 10.8 器高 2.0	土坑3 手捏ね	Fig. 30-23 Pl. 31-22	染付磁器碗 肥前	口径 (10.2) 器高 (5.8) 底径 4.2	土坑21
Fig. 30-5 Pl. 30-5	陶器碗 信楽	口径 11.0 器高 6.4 底径 4.6	土坑3 鉄絵 笹文	Fig. 30-24 Pl. 31-24	染付磁器碗 肥前	口径 9.8 器高 7.65 底径 5.0	土坑21 外 網目文
Fig. 30-6 Pl. 30-6	磁器碗 唐津	口径 11.4 器高 4.9 底径 4.2	土坑3 刷毛目	Fig. 30-25 Pl. 31-23	染付磁器碗 肥前	口径 10.0 器高 5.7 底径 4.2	土坑21 外 山水文 銘鉄あり
Fig. 30-7 Pl. 30-7	染付磁器筒型 碗 肥前	口径 10.2 器高 8.2 底径 6.0	土坑3 印判子	Fig. 31-26 Pl. 31-25	陶器壺 瀬戸・美濃	口径 8.2 器高 10.0 底径 7.9	土坑30 外 灰軸 内 黒軸
Fig. 30-8 Pl. 30-8	染付磁器碗 肥前	口径 9.8 器高 5.6 底径 2.1	土坑3 外 花文のみ印判 子 草花文	Fig. 31-27 Pl. 31-26	青磁染付鉢 肥前	口径 23.6 器高 7.45 底径 11.8	土坑30 外 青磁軸 内 松文
Fig. 30-9 Pl. 30-9	染付磁器碗 肥前	口径 11.3 器高 5.5 底径 3.9	土坑3 外 笹竹文	Fig. 31-28 Pl. 31-27	染付磁器碗 肥前	口径 5.2 器高 11.2 底径 4.4	土坑30 外 梅文
Fig. 30-10 Pl. 30-10	染付磁器碗 肥前	口径 9.8 器高 5.5 底径 3.9	土坑3 外 笹竹文	Fig. 31-29 Pl. 31-28	染付磁器碗 肥前	口径 9.6 器高 5.5 底径 4.2	土坑30 外 梅文
Fig. 30-11 Pl. 30-12	陶器碗 絵唐津	口径 (11.5) 器高 12.9 底径 4.2	土坑5 内 鉄絵 高台無軸	Fig. 31-30 Pl. 32-29	染付磁器碗 肥前	口径 6.7 器高 11.0 底径 4.2	土坑30 外 松文 内 斜 格子文 五弁花
Fig. 30-12 Pl. 30-11	白磁皿 肥前	口径 9.5 器高 2.7 底径 3.6	土坑5 蛇ノ目軸ハギ	Fig. 31-31 Pl. 32-30	青磁碗 肥前	口径 11.6 器高 6.15 底径 3.7	土坑30 内 蛇ノ目軸ハギ
Fig. 30-13 Pl. 30-13	染付磁器皿 肥前	口径 13.4 器高 3.05 底径 6.5	土坑8 内 斜交線 五弁 花 蛇ノ目軸ハギ	Fig. 31-32 Pl. 32-31	白磁紅皿	口径 5.0 器高 1.65 底径 1.8	土坑30
Fig. 30-14 Pl. 30-14	銅銭	径 3.4	土坑11 寛永通宝	Fig. 31-33 Pl. 32-32	染付磁器碗 肥前	口径 10.6 器高 5.0 底径 4.4	土坑30 外 印判子 (柄・ 弁折の中に権)
Fig. 30-15 Pl. 30-15	燈明受皿 (土師質)	口径 5.8 器高 0.9	土坑12 ロクロ成形 糸切 り底 柿軸	Fig. 31-34 Pl. 23-33	燈明皿 (土師質)	口径 8.8 器高 1.55	土坑31 ロクロ成形 糸切 り底 柿軸
Fig. 30-16 Pl. 30-16	燈明皿	口径 6.1 器高 1.1	土坑12 ロクロ成形 糸切 り底 柿軸	Fig. 31-35 Pl. 32-34	埴壇壺 (土師質)	口径 6.8 器高 7.7	土坑31
Fig. 30-17 Pl. 30-17	燈明皿 (土師質)	口径 6.3 器高 1.3	土坑12 ロクロ成形 糸切 り底 柿軸	Fig. 31-36 Pl. 32-36	染付磁器皿 肥前	口径 (17.8) 器高 (2.5) 底径 12.0	土坑31 内 松竹梅文 外 「大明成化年装束」
Fig. 30-18 Pl. 31-18	土師皿 (燈明皿)	口径 10.8 器高 2.5	土坑19 手捏ね	Fig. 31-37 Pl. 32-35	青磁染付碗 肥前	口径 8.2 器高 4.3 底径 3.7	土坑31 内 五弁花
Fig. 30-19	染付磁器碗 肥前	口径 9.8 器高 5.6	土坑19	Fig. 31-38 Pl. 32-37	染付磁器仏 飯具 肥前	口径 (11.55) 器高 (5.0) 底径 4.1	土坑31

表9 第58次調査出土遺物観察表(1)



番号	機種	法量	出土地点・備考	番号	機種	法量	出土地点・備考
Fig. 31-39 Pl. 32-38	染付磁器小碗 肥前	口径 7.8 器高 4.35 底径 3.2	土坑31 外 印判手(横)	Fig. 33-58 Pl. 34-51	土師皿	口径 5.4 器高 1.85	第1次焼土層 口クロ成形 糸切り底
Fig. 31-40 Pl. 32-39	染付磁器碗 肥前	口径 7.1 器高 3.8 底径 2.8	土坑31	Fig. 33-59 Pl. 34-52	自磁紅皿	口径 6.6 器高 1.3	第1次焼土層
Fig. 31-41	染付磁器碗 肥前	口径 8.8 器高 (3.7)	土坑55 外 網目文	Fig. 33-60 Pl. 34-53	陶器皿 唐津	口径 (11.0) 器高 (1.7) 底径 4.0	第1次焼土層 砂目
Fig. 31-42	陶器塼 備前	口径 41.6 器高 (9.3)	土坑57	Fig. 33-61 Pl. 34-54	陶器碗 京焼写し	口径 5.4 器高 6.6 底径 4.5	第1次焼土層
Fig. 31-43 Pl. 32-40	陶器碗 瀬戸・美濃	口径 (10.5) 器高 (3.5) 底径 4.0	溝 1 高台無軸	Fig. 33-62 Pl. 34-55	陶器碗 唐津	口径 11.4 器高 5.9 底径 4.3	第1次焼土層 刷目目
Fig. 32-44	土師皿	口径 8.8 器高 1.3	第2次焼土層 手捏ね	Fig. 33-63 Pl. 34-56	陶器皿	口径 (14.2) 器高 (3.5) 底径 5.9	第1次焼土層 蛇ノ目軸ハギ 高台無軸
Fig. 32-45 Pl. 33-41	陶器筒型碗 肥前	口径 6.8 器高 5.1	第2次焼土層 内 高台無軸	Fig. 33-64 Pl. 34-57	陶器皿	口径 8.7 器高 2.4	第1次焼土層
Fig. 32-46 Pl. 33-42	銅銭	径 3.8	第2次焼土層 寛永通宝	Fig. 33-65 Pl. 34-58	陶器壺	口径 10.2 器高 11.0	第1次焼土層 「コヤ」銘あり
Fig. 32-47 Pl. 33-43	砥石	縦 12.9 横 5.7 厚 0.8	第2次焼土層	Fig. 33-66 Pl. 34-59	陶器日付罌 丹波	口径 28.2 器高 (8.6)	第1次焼土層
Fig. 32-48 Pl. 33-14	染付磁器碗 肥前	口径 (9.0) 器高 (3.0) 底径 4.2	第4層 内外 二重網目文 見込目着文	Fig. 33-67 Pl. 34-60	陶器楕碗 肥前	口径 41.4 器高 (6.9)	第1次焼土層
Fig. 32-49 Pl. 33-45	染付磁器小杯 肥前	口径 6.5 器高 3.25 高台径 2.6	第4層	Fig. 33-68 Pl. 34-60	陶器楕鉢 丹波	口径 41.4 器高 (6.9)	第1次焼土層
Fig. 32-50 Pl. 33-46	青磁仏飯具 肥前	口径 (6.1) 器高 (3.7) 底径 4.0	第4層 底部無軸	Fig. 34-69 Pl. 34-61	染付磁器碗 肥前	口径 11.2 器高 5.9 底径 5.2	第1次焼土層 外 縄文
Fig. 32-51 Pl. 33-47	石製品	長 14.1 器高 5.5	第4層	Fig. 34-70 Pl. 34-62	染付磁器碗 肥前	口径 10.6 器高 5.95 底径 4.2	第1次焼土層 外 草花文
Fig. 32-52 Pl. 33-48	銅銭	径 3.6	第4層 寛永通宝	Fig. 34-71 Pl. 34-63	染付磁器碗 肥前	口径 10.6 器高 6.15 底径 4.4	第1次焼土層 外 草花文
Fig. 32-53 Pl. 33-48	銅銭	径 3.6	第4層 寛永通宝	Fig. 34-72 Pl. 35-64	染付磁器碗 肥前	口径 9.6 器高 5.75 底径 4.8	第1次焼土層 内外 唐花文 銘款あり
Fig. 32-54 Pl. 33-48	銅銭	径 3.4	第4層 寛永通宝	Fig. 34-73 Pl. 35-65	染付磁器皿 肥前	口径 13.2 器高 2.9 底径 7.2	第1次焼土層 内 槌弾き
Fig. 32-55 Pl. 33-49	土人形 (大黒さん)	長 6.6 幅 4.45	第4層 型合わせ	Fig. 34-74 Pl. 35-66	染付磁器皿 肥前	口径 13.4 器高 2.9 底径 7.2	第1次焼土層 内 槌弾き
Fig. 32-56 Pl. 33-48	土人形 (小船に乗った人)	長 3.65 幅 2.9 高 1.75	第4層	Fig. 34-75 Pl. 35-67	染付磁器仏飯 具 肥前	口径 9.0 器高 6.0 底径 4.2	第1次焼土層
Fig. 33-57 Pl. 33-50	燈明皿 (土師質)	口径 6.2 器高 1.05	第1次焼土層 口クロ成形 糸切り底 棒軸	Fig. 34-76 Pl. 35-68	染付磁器蓋 肥前	口径 7.8 器高 2.3	第1次焼土層 外 唐草文

表10 第58次調査出土遺物観察表(2)

第2章 調査成果

番号	機種	法量	出土地点・備考	番号	機種	法量	出土地点・備考
Fig. 34-77 Pl. 35-69	染付磁器地利肥前	口径 (2.6) 器高 (17.5) 底径 5.4	第1次焼土層 外 草花文	Fig. 36-87 Pl. 36-77	銅銭	径 3.4	第6層 寛永通宝
Fig. 34-78 Pl. 35-70	染付磁器地利肥前	口径 11.7 器高 (9.75) 底径 6.8	第1次焼土層	Fig. 36-88 Pl. 36-78	銅銭	径 3.5	第6層 寛永通宝
Fig. 34-79 Pl. 35-71	染付磁器香油壺	胴径 10.4 器高 (7.15) 底径 5.95	第1次焼土層	Fig. 36-89 Pl. 36-79	銅銭	径 3.2	第6層 寛永通宝
Fig. 34-80 Pl. 35-72	銅銭	径 3.6	第1次焼土層 寛永通宝	Fig. 36-90 Pl. 36-80	土師皿	口径 9.2 器高 2.0	第7層 手拉ね 内外 綴付着
Fig. 34-81 Pl. 36-73	軒丸瓦	径 (10.55) 厚 1.7	第1次焼土層	Fig. 36-91 Pl. 36-81	天目碗	口径 11.0 器高 (5.45)	第7層
Fig. 34-82 Pl. 36-74	軒丸瓦	口径 15.55 器高 1.9	第1次焼土層	Fig. 36-92 Pl. 36-82	陶器皿 唐津	口径 (23.35) 器高 (5.4) 底径 10.85	第7層 二彩唐津
Fig. 35-83	石臼	径 27.9 高 8.6	第1次焼土層 (第5層) 8区曲5条	Fig. 36-93	土師皿	口径 7.8 器高 1.7	第8層直上 手拉ね
Fig. 36-84	陶器壺	口径 24.0 器高 24.5 底径 15.0	第6層	Fig. 36-94	陶器鉢 瀬戸・美濃	口径 (24.9) 器高 (2.6)	第8層直上 底部無軸
Fig. 36-85 Pl. 36-75	染付磁器碗肥前	口径 5.4 器高 6.7 底径 4.2	第6層直上 外 網目文	Fig. 36-95 Pl. 36-83	陶器裏 備前	厚 1.4	第8層直上 へう記号
Fig. 36-86 Pl. 36-76	銅銭	径 3.6	第6層 寛永通宝				

表11 第58次調査出土遺物観察表(3)

## 第5節 第59次調査

所在地 伊丹市宮ノ前3丁目10-4  
 調査面積 24㎡  
 調査期間 昭和63年2月4日～2月10日

### 調査概要

第59次調査は、個人住宅建設に伴って実施したものである。調査地点は、有岡城岸ノ砦跡に推定されている猪名野神社境内の隣接地で、本書所載の第56次調査地点から南に40mの所である。

本地点は、江戸時代には天王町に属し、猪名野神社参道に面している。

今回の調査目的は第56次調査同様、有岡城惣構の北端に置かれた岸ノ砦跡の調査で、実体の不明な砦の構造について何等かの資料が得られるのではないかと考えて実施した。

### 調査成果

個人住宅建設予定範囲の発掘であり、調査面積は24㎡(3m×4m)と狭く、確認調査に等しい規模である。調査の目的は岸ノ砦跡の調査であったが、検出された遺構及び遺物の中には中世に遡るものは全く無かった。検出した遺構は、古くても江戸中期の所産である。

### 遺構

調査の結果、調査範囲より13基の土坑を検出した。土坑のうち、土坑4、土坑12、土坑13は一列に並んでおり、何かの目的で連続して掘られたと考えられる。内部からは遺物が少量出土するのみで、ゴミ穴とは考えられない。

その他の土坑については、土坑3の他からは遺物の出土も少なく遺構の性格や時期については不明である。

### 遺物

土坑3(1) 1は染付皿。内外面には唐草文が描かれる。土坑13出土の皿(3)と同一個体の可能性がある。

土坑12(5) 12は染付唐草文皿。器厚が厚く粗製品と考えられる。見込みは蛇ノ目軸刺ぎされ、中心部に崩れた五弁花が配されている。



図37 第59次調査地点図(1/5,000)

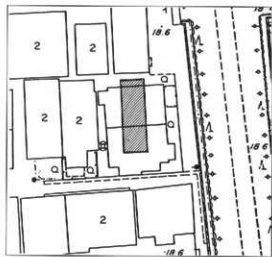


図38 調査区設定図(1/500)

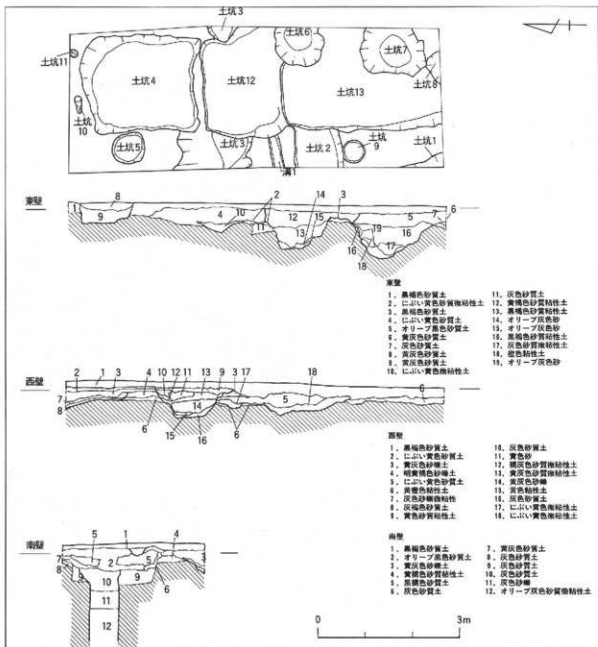


図39 第59次調査遺構実測図

土坑13(2～4) 2は印判文染付碗。外面には井桁文の中に花文が描かれる。3は染付牡丹文皿。外面には唐草文が描かれる。4は染付筒型碗。外面の文様は型紙刷り技法によって描かれている。また見込みに崩れた五弁花が描かれている。

遺構外出土遺物(6～15) 6は染付雪輪文碗の蓋。7は染付網目文皿。8染付斜行線文皿である。9は染付碗。見込みに3箇所が目跡が残る。10は刷版刷りの染付皿。これは明治まで時代が降る。11は紅皿。12は染付け皿。緑文様には嬰略文が描かれている。13は白磁碗。14は染付松文碗。15は染付筒型碗。外面には菊花文、見込みに崩れた五弁花が描かれている。

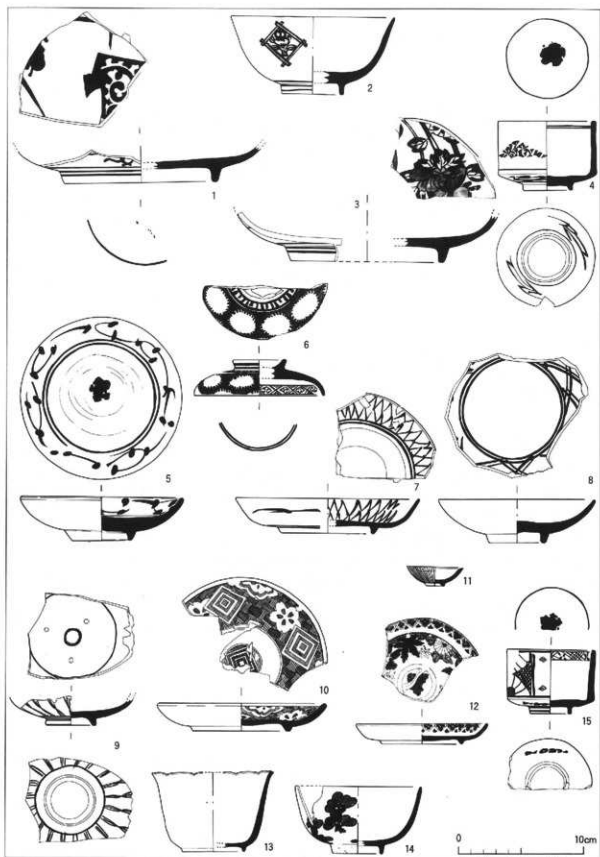


图40 第59次調査出土遺物実測図

1 土坑3, 2~4 土坑13,  
5 土坑12, 6~15 第2層上面

## 第2章 調査成果

番号	機種	法量	出土地点・備考	番号	機種	法量	出土地点・備考
Fig. 40-1 Pl. 37-1	染付磁器皿 肥前	口径 (19.6) 器高 (2.9) 底径 12.2	土坑3 内 牡丹文 外 唐草文	Fig. 40-9	染付磁器皿	口径 (9.8) 器高 (2.2) 底径 4.0	第2層上面 外 網目文 内 丸文
Fig. 40-2 Pl. 37-2	染付磁器碗 肥前	口径 13.2 器高 6.2 底径 5.0	土坑13 外 印判 井桁の中に花文	Fig. 40-10 Pl. 37-9	磁器皿	口径 13.2 器高 2.2 底径 7.6	第2層表面 内 型紙刷り緑色 板文 口縁
Fig. 40-3 Pl. 37-3	染付磁器皿 肥前	口径 (20.8) 器高 (3.8) 底径 12.2	土坑13 内 牡丹文 外 唐草文	Fig. 40-11 Pl. 37-10	白磁紅皿	口径 4.5 器高 1.5 底径 1.4	第2層上面
Fig. 40-4 Pl. 37-4	染付磁器筒型 碗 肥前	口径 9.8 器高 5.6 底径 4.0	土坑13 内 五弁花 外 型紙刷	Fig. 40-12 Pl. 38-11	磁器皿	口径 10.4 器高 1.65 底径 6.4	第2層上面 内 型紙刷り 菊文
Fig. 40-5 Pl. 37-5	染付磁器皿 肥前	口径 13.0 器高 3.7 底径 4.8	土坑12 内 唐草文	Fig. 40-13 Pl. 38-12	白磁碗	口径 9.7 器高 6.3 底径 5.0	第2層上面 輪花碗
Fig. 40-6 Pl. 37-6	染付磁器蓋 肥前	口径 10.4 器高 2.9	第2層上面 内 雪輪文 外 斜格子文	Fig. 40-14 Pl. 38-13	染付磁器碗 肥前	口径 10.0 器高 5.4 底径 4.0	第2層上面 外 印判手(松文)
Fig. 40-7 Pl. 37-7	染付磁器皿 肥前	口径 14.8 器高 2.8 底径 7.2	第2層上面 内 網目文 蛇ノ目軸ハギ	Fig. 40-15 Pl. 38-14	染付磁器筒型 碗 肥前	口径 3.5 器高 5.1 底径 1.6	第2層上面 外 菊文 内 斜 格子文 五弁花
Fig. 40-8 Pl. 37-8	染付磁器皿 肥前	口径 12.6 器高 3.5 底径 4.2	第2層上面 内 斜格子文 蛇ノ目軸ハギ				

表12 第59次調査出土遺物観察表

### 小 結

第59次調査地点は、岸ノ砦推定地である現在の猪名野神社境内に隣接した場所である。岸ノ砦に関する何等かの遺構でも検出できればと考えていたが、調査の結果何も確認できなかった。第3節の述べた第56次調査も今回の調査同様に岸ノ砦跡の調査であったが、やはり何等検出することはできなかった。岸ノ砦は有岡城惣構の北端を守る砦として「信長公記」に登場するが、現在砦跡が国史跡に指定されていることもあり、内部の本格的な調査は行われていない。従って考古学的にその遺構等が確認されていないのである。これまでの調査では史跡指定地以外が対象となっているため、砦跡の遺構が検出されなくても不思議ではないが、砦の範囲が現在の神社境内以外に及んでいる可能性もあることから、今回第56次、59次調査のように隣接部の調査を実施してきたのである。これまでの調査において関係遺構が確認できていないからといって、周辺部に堀跡や土塁跡が及んでいないとは限らない。今後さらに地道な調査を続けていく必要がある。

### 第3章 結語

本書は、昭和62年度に実施した有岡城・伊丹郷町遺跡第52次、53次、56次、58次、59次調査の成果を取録している。第58次調査は市道拡幅工事に伴って実施した市の直営事業で、その他は個人住宅建設及び店舗付住宅建設に伴って実施した国庫補助事業である。

次に各調査の概要を記して結語にかえたい。

#### 第52次調査

調査場所は、江戸時代昆陽口村に属し、第53次調査、第58次調査地点は道の向かい側になる。伊丹郷町関係の古絵図から各地点の江戸時代の様子を見てみると、当地点には既に寛文九年伊丹郷町絵図に家並みが描かれていることから、江戸時代の早い時期から町が出来上がっていたことがわかる。また、これより先、最岡城の廃城まもない頃を描いた文録伊丹之図(図41)においても家並みが描かれている。この絵図は幕末の天保七年になって作成されたもので、どこまで当時の状況を伝えているか問題もあるが、これまでのところ、かなり当時の状況を伝えているものと考えられている。こうして見てみると、第52次調査地点は郷町の中でも最も早くから開けていた場所であることがわかる。

今回の発掘調査では、調査面積が小さいことから詳しいことは言えないが、土坑29出土の唐津焼溝緑皿は江戸時代初期までの所産であることから、絵図にあるように廃城後間もなく町屋が建てられたものと考えられる。しかし、有岡城が存在していた天正七年以前の遺物、遺構は検出されなかった。

#### 第53次調査

この調査は、個人住宅建設に伴って実施したもので、建物の基礎の関係から上部層の調査に留まっている。従って江戸時代初期以前の文化層は未調査となっている。そのため第58次調査検出の堀の繋がりも当地点では確認できていない。

検出した遺構面は2面ある。下層の第2面は、焼土層が厚く堆積していることから、火災によるものと考えられる。出土遺物は17世紀後半から18世紀初めの頃であるので、元禄時代に発生した伊丹郷町大火の跡と推定される。また、第1面は、大火後に形成された生活面で、18世紀前半以降の時期が求められる。検出遺構には、井戸3基と多数の土坑がある。また、時期は下がるが、調査区の最も奥側から水琴窟と便所の跡が検出された。

#### 第56次調査

第56次調査地点は、猪名野神社の境内の南に隣接する。この調査の目的は「岸の砦」に関する遺構の確認にあった。しかし、確認されたのは江戸時代以降のわずかな土坑である。出土した遺物についても、くらわんか手の肥前磁器が少量出土しただけに留まった。

#### 第58次調査

第58次調査は、53次調査地点の南側に隣接した場所で行った。江戸時代には昆陽口村に属している。発掘調査により、当地点には4枚の生活面が存続することが判明した。上から第1遺構面は18世紀前半頃、第2遺構面は17世紀後半～18世紀前半頃、第3遺構面は17世紀中頃～後半、第4遺構面は有岡城の存在していた天正年間以前と考えられる。第53次調査との対応は、当地点の第1遺構面、第2遺構面がそれぞれ第53次調査の第1遺構面、第2遺構面と連続すると考えられる。

第2遺構面で確認された火事跡については、本文中で述べたように、元禄時代に伊丹郷町を襲った

大火あるいは享保十四年の火事との関係が推定される。元禄の大火は3回が記録に残っている。この内、当地点に影響を与えたとと思われるものは、元禄元年と十五年(1702)であり、出土遺物からすると十五年の大火の可能性が強い。

第4遺構面から検出された堀跡は、南北方向に延びている。堀幅が3.5mと小さく、この堀が防衛上重要な意味を持っていたか判らないが、同規模の堀は有岡城主郭部の周辺部において多数検出されており、惣構えの中に、こうした堀が計画的に配置されていたと考えられる。ただこれまでに発掘された同様の堀については、ほとんどが待町に所在し、今回のように町屋地域での発掘例はない。町屋地域に堀割のようなものが存在したのか、あるいは今回発見の堀が特別に屋敷の周囲に設けられたものであるのか、今後調査をまって検討していきたい。

#### 第59次調査

第59次調査地点は、江戸時代に天王町に属し、猪名野神社参道脇に位置する。天王町は伊丹郷町の中心である伊丹村を構成する町の一つであるが、その成立は遅く、正徳年間までの成立となっている。

発掘調査の結果、町の成立時期を遡る遺構および遺物などは発見されなかった。調査範囲の中で検出された遺構は、性格不明の土坑であり、その時期は江戸時代後期以降である。今回の調査の目的の一つには、有岡城の惣構えの北端に構築された「岸の砦」関係の遺構の確認であったが、その存在を明らかにするものは発見できなかった。

本書は昭和62年度に実施した調査の成果の一部をまとめたものである。現在までに有岡城の調査は125次調査を越えており、未整理の資料が資料が蓄積されている状況にある。今後順次整理し、報告書を刊行していきたい。

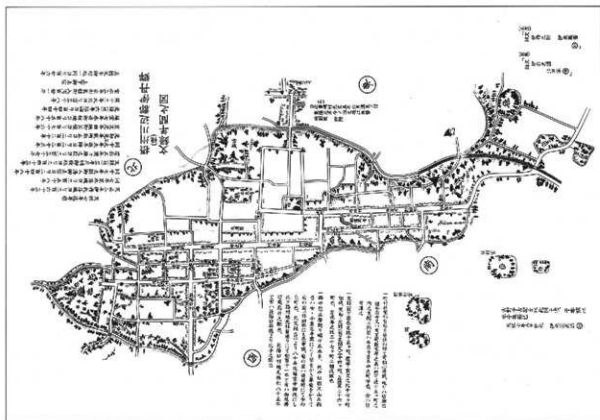


図41 文録伊丹之図





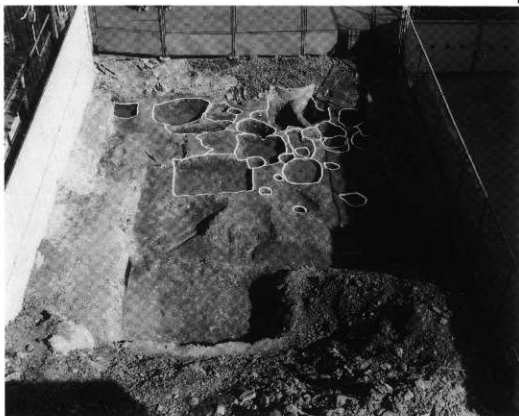
a. 有岡城跡・伊丹郷町遺跡現況

宮ノ前2丁目より北方を望む。写真中央のアケードが宮ノ前商店街、その先樹木の繁るところが、猪名野神社境内(岸ノ森跡)である。



b. 有岡城跡・伊丹郷町遺跡現況

宮ノ前2丁目より南西方向を望む。写真中央の大木が法巖寺のクスノキ(県指定)、このあたりが有岡城惣構の西縁となる。



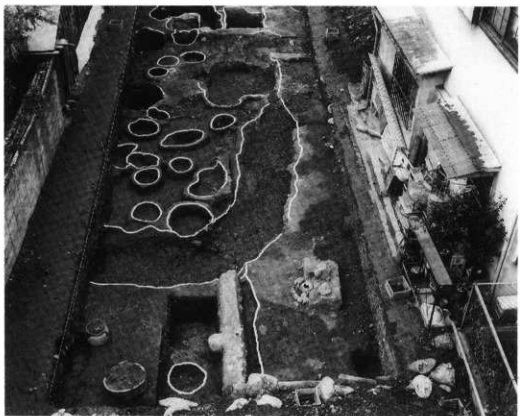
a. 第52次調査全景(西より)  
調査範囲は全体に攪乱が著しく遺跡の遺存状態が悪い。



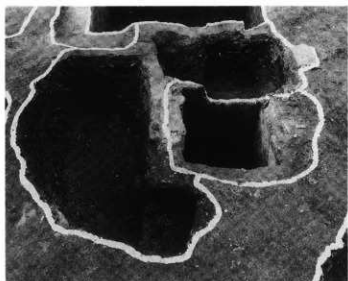
b. 第53次調査地点遠景(西より)  
周辺には江戸時代以来の古い家並みが残っている。



a. 第53次調査 第1遺構面全景(東より)  
この敷地は、間口が狭く奥行の長い地割となっている。



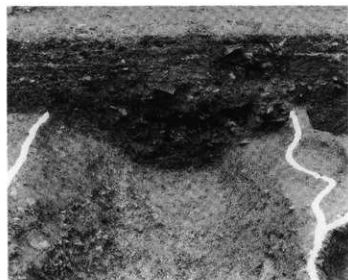
b. 第53次調査 第2遺構面(東より)  
写真中央のL字形の溝(溝1)からは、17c末～18c初頃の陶磁器が多数出土した。



a. 第53次調査検出遺構  
井戸2、井戸3



b. 第53次調査検出遺構  
井戸1



c. 第53次調査検出遺構  
溝1



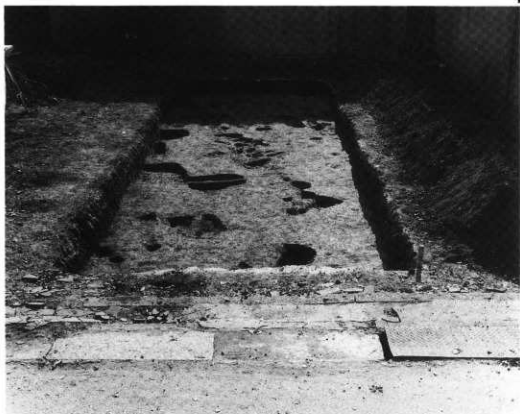
a. 第53次調査遺物出土状況



b. 第53次調査遺物出土状況  
土坑53

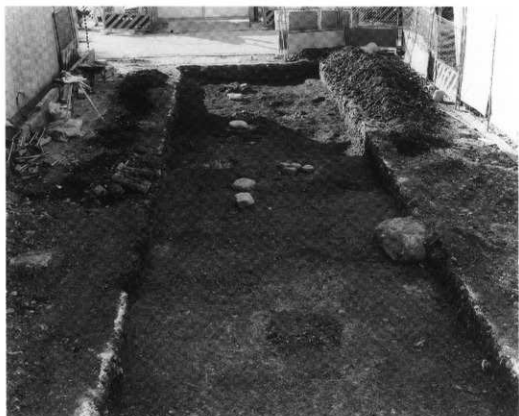


c. 第53次調査水琴窟検出状況  
この水琴窟は、大型の植木鉢を転用している。



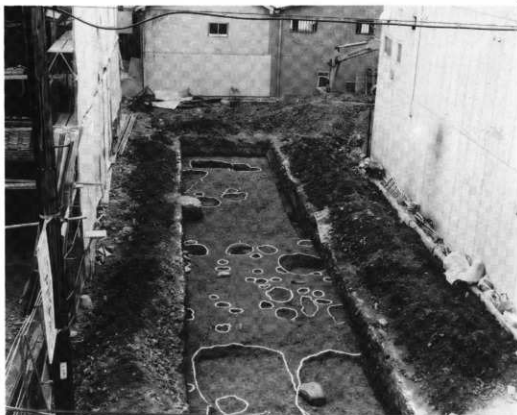
a. 第56次調査全景(北より)

調査地点は、猿名野神社境内に隣接したところで、岸ノ砦に関する遺構を期待したが、確認されなかった。

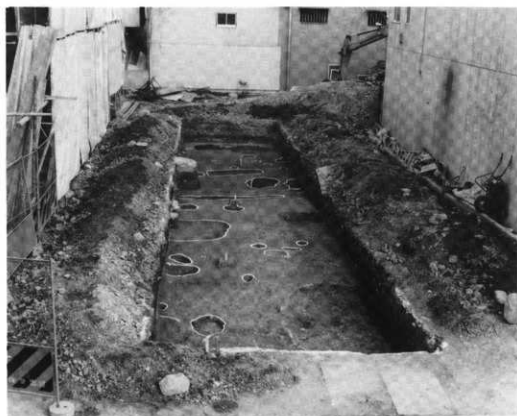


b. 第58次調査 第1遺構面(東より)

調査区中央部に一列礎石が並ぶ。



a. 第58次調査 第2遺構面全景(西より)  
この遺構面上には、元禄大火の焼土層が堆積していた。



b. 第58次調査 第3遺構面(西より)  
江戸初期の遺構面。建物の存在を示す礎石は検出されていない。



a. 第58次調査 第4遺構面(東より)  
調査区中央部において、南北方向に延びる堀跡が検出された。

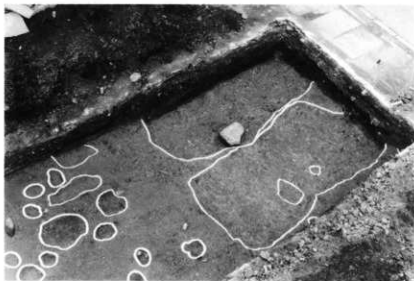


b. 堀跡検出状況(南より)  
堀の断面は逆台形状を呈している。

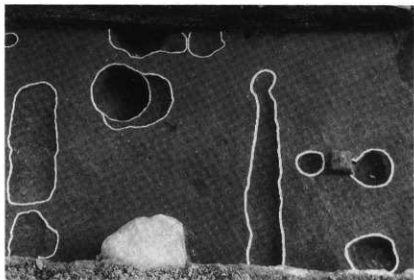




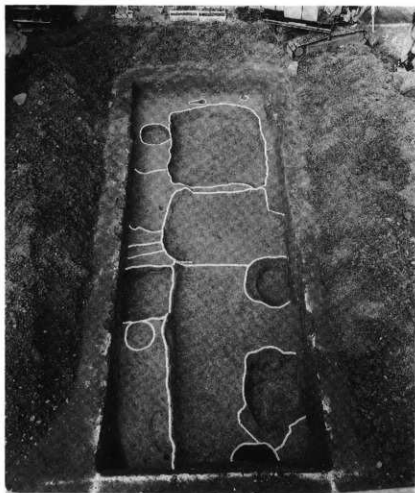
a. 第58次調査検出遺構  
第1遺構面検出の礎石。



b. 第58次調査検出遺構  
写真中央の方形の土坑には、  
火災による焼土や炭が厚く  
堆積していた。



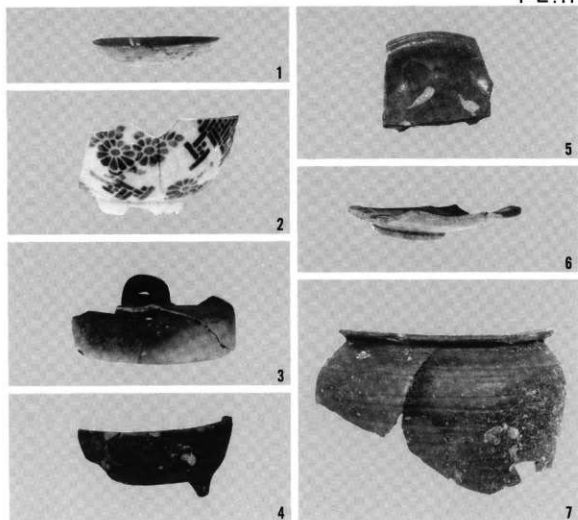
c. 第58次調査検出遺構  
第3遺構面検出の土坑と溝。



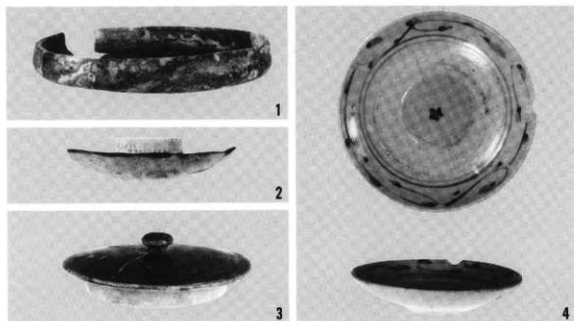
a. 第59次調査全景(南より)  
調査区内には、大型の方形  
土坑が重複する。



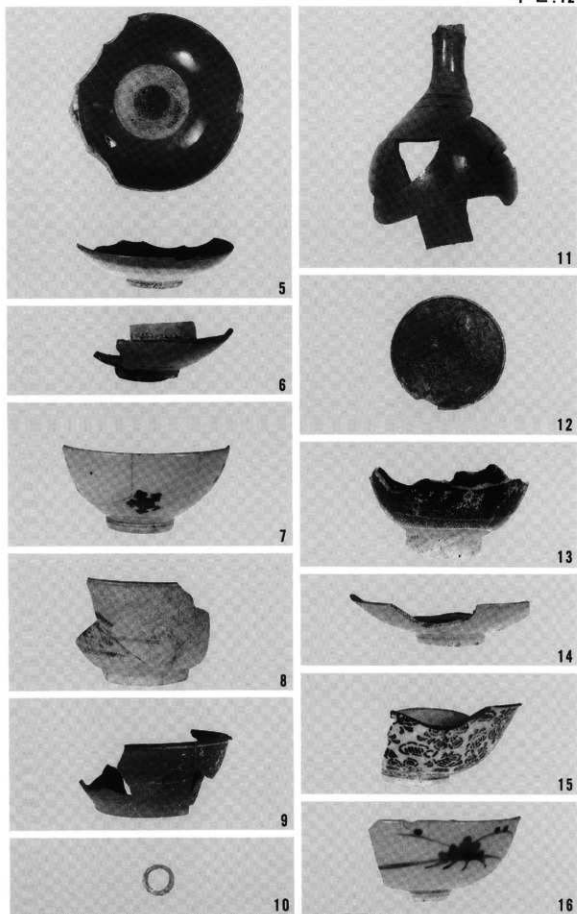
b. 第59次調査全景(南より)



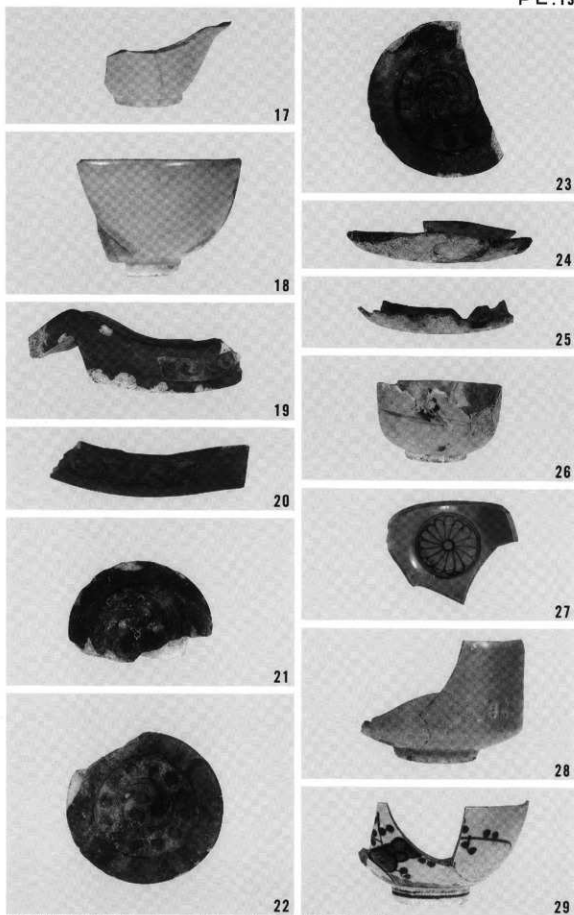
第52次調査出土遺物 | 土坑15, 2~4・7 土坑23, 5・6 土坑19



第53次調査出土遺物(1) | 土坑13, 2~4 土坑16

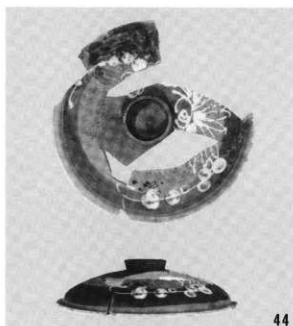


第53次調査出土遺物(2) 5~12 土坑19, 13~15 土坑21, 16 土坑22

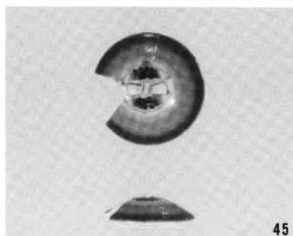




第53次調査出土遺物(4) 30・31 土坑26, 32 土坑29, 33~43 土坑33



44



45



46



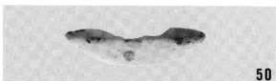
47



48



49



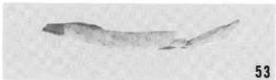
50



51



52



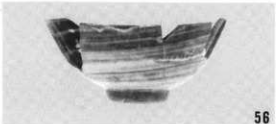
53



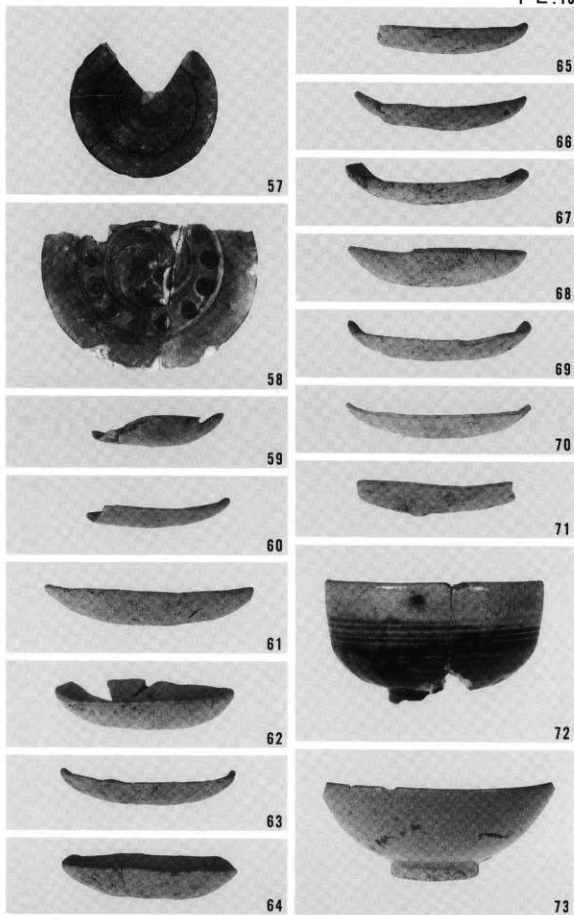
54



55



56

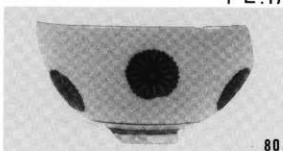


第53次調査出土遺物(6) 57・58 土坑38, 59~73 土坑39





74



80



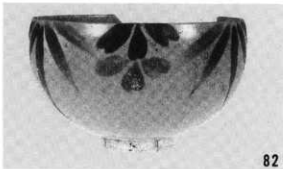
75



81



76



82



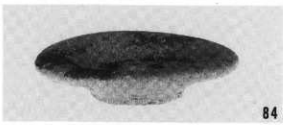
77



83



78



84



79

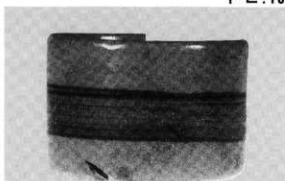


85

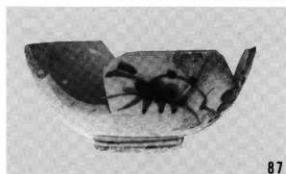
第53次調査出土遺物(7) 74~77 土坑39, 78・79 土坑41, 80~82 土坑45, 83~85 土坑48



86



91



87



92



88



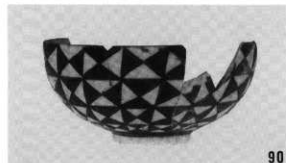
93



89



94



90



95



96

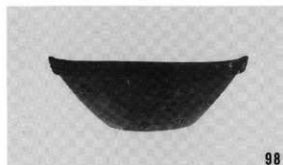
第53次調査出土遺物(8) 86~91 土坑48, 92 土坑51, 93~96 土坑53



97



102



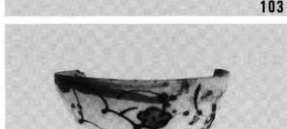
98



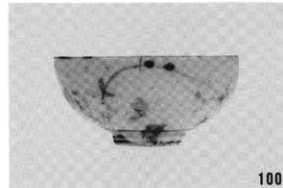
103



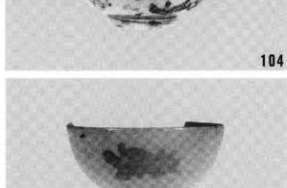
99



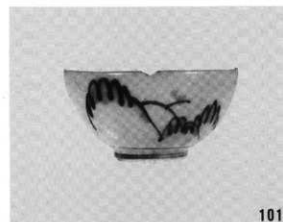
104



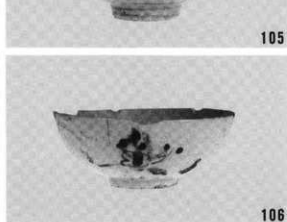
100



105



101



106



107



108



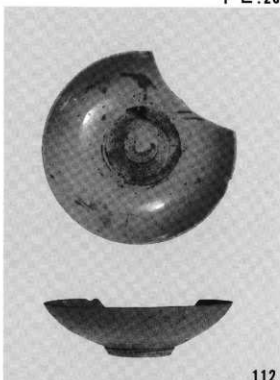
109



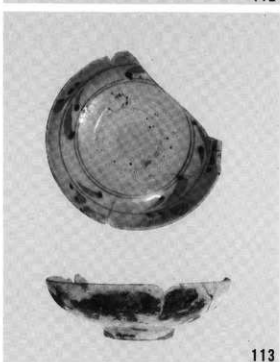
110



111



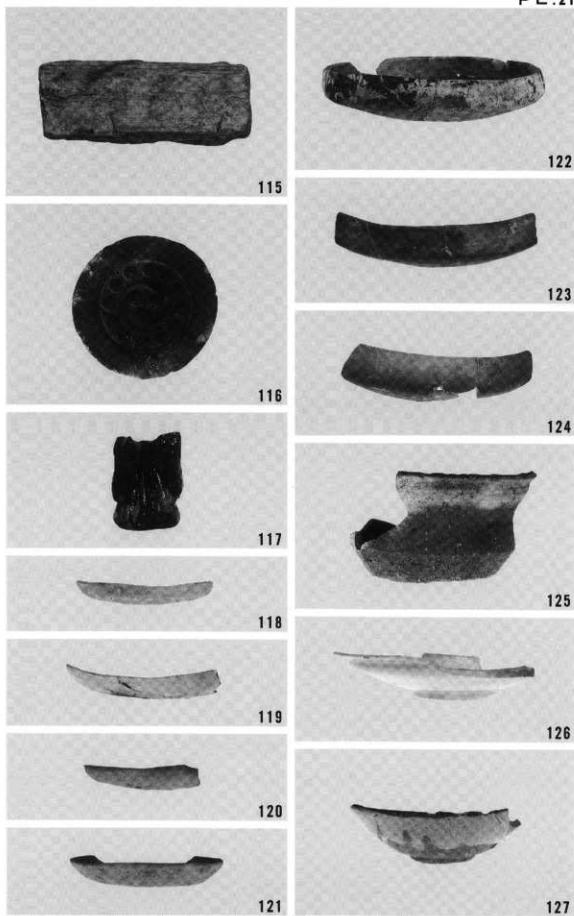
112

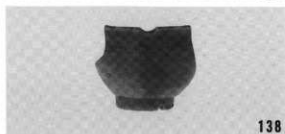
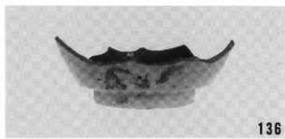


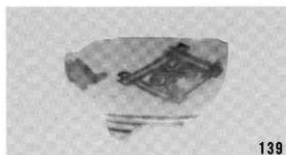
113



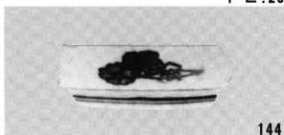
114



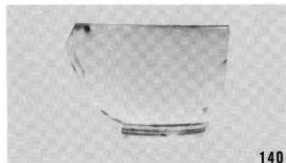




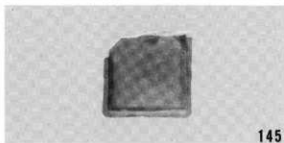
139



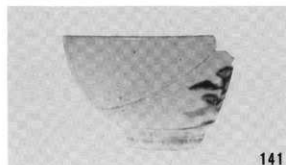
144



140



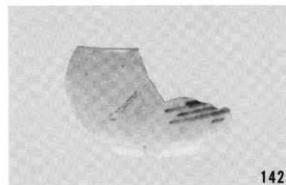
145



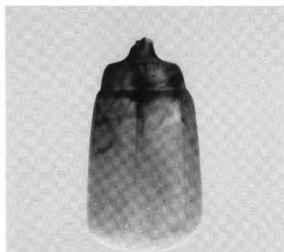
141



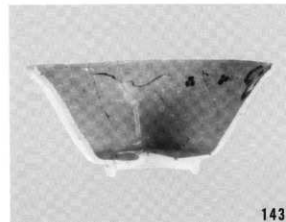
146



142



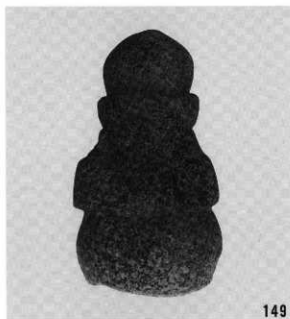
147



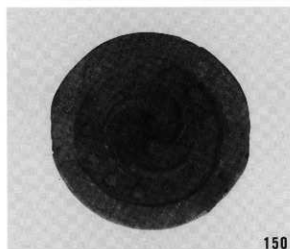
143



148



149



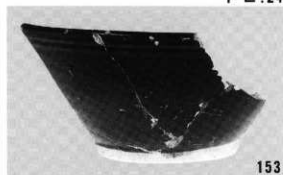
150



151



152



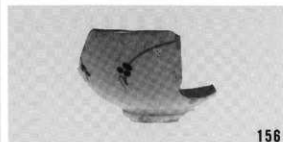
153



154



155



156



157



158



159





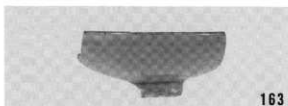
160



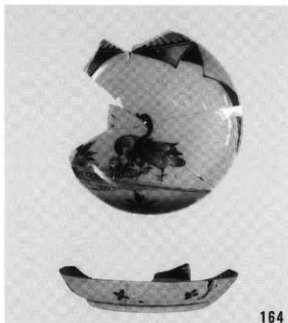
161



162



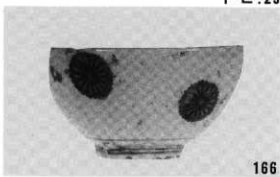
163



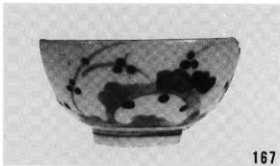
164



165



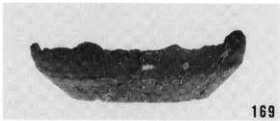
166



167



168



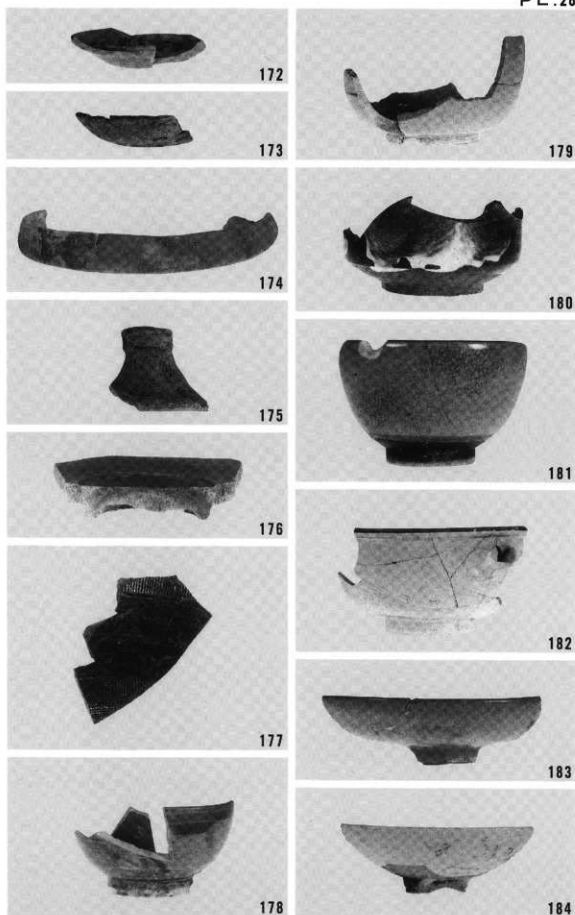
169

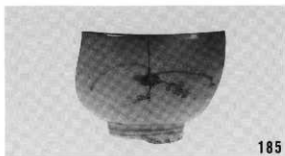


170



171

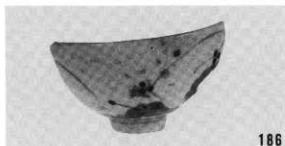




185



190



186



191



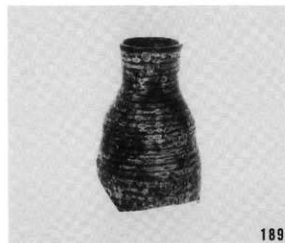
187



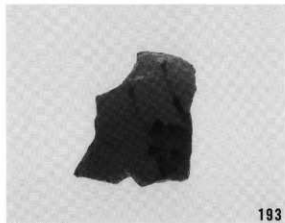
188



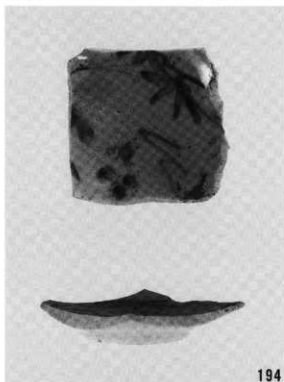
192



189



193



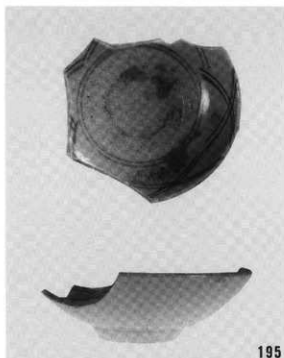
194



197



198



195



199



200



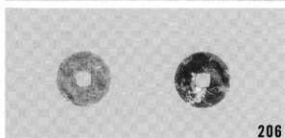
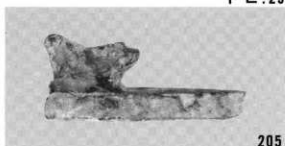
201



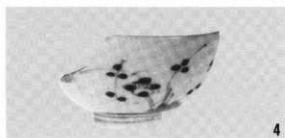
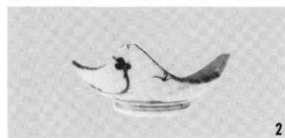
196



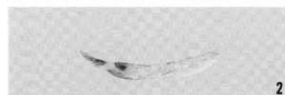
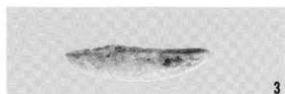
202



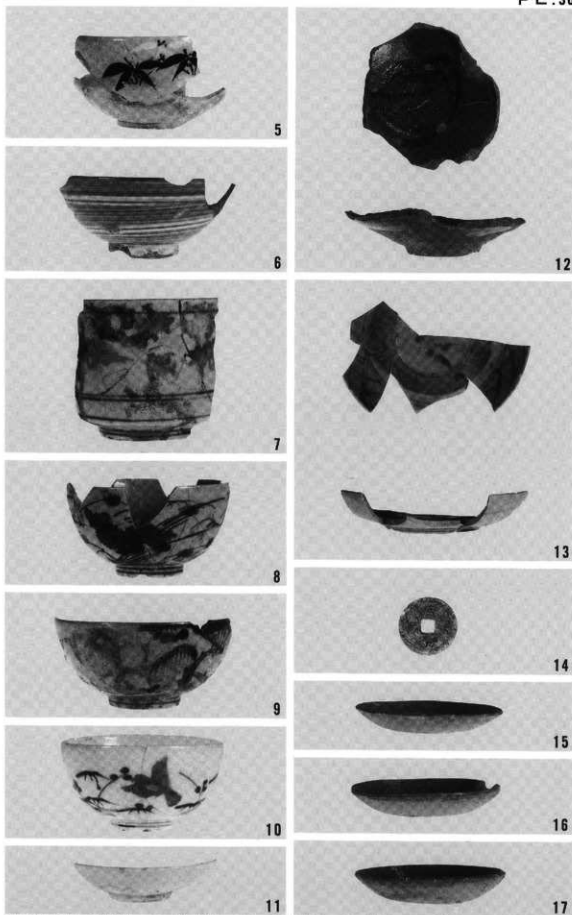
第53次調査出土遺物(時) 203 南北セクション, 204~207 表採



第56次調査出土遺物 1・3・4 土坑II, 2 柱穴3



第58次調査出土遺物(I) 1~4 土坑3



第58次調査出土遺物(2) 5~10 土坑3, 11・12 土坑5, 13 土坑8, 14 土坑11, 15~17 土坑12



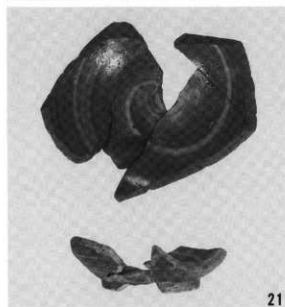
18



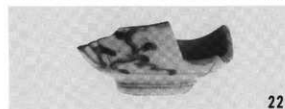
19



20



21



22



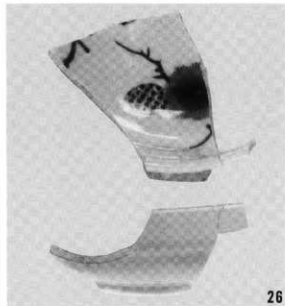
23



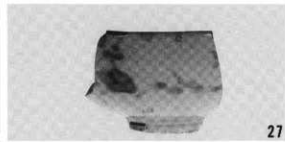
24



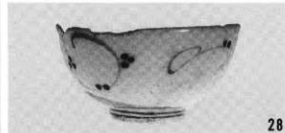
25



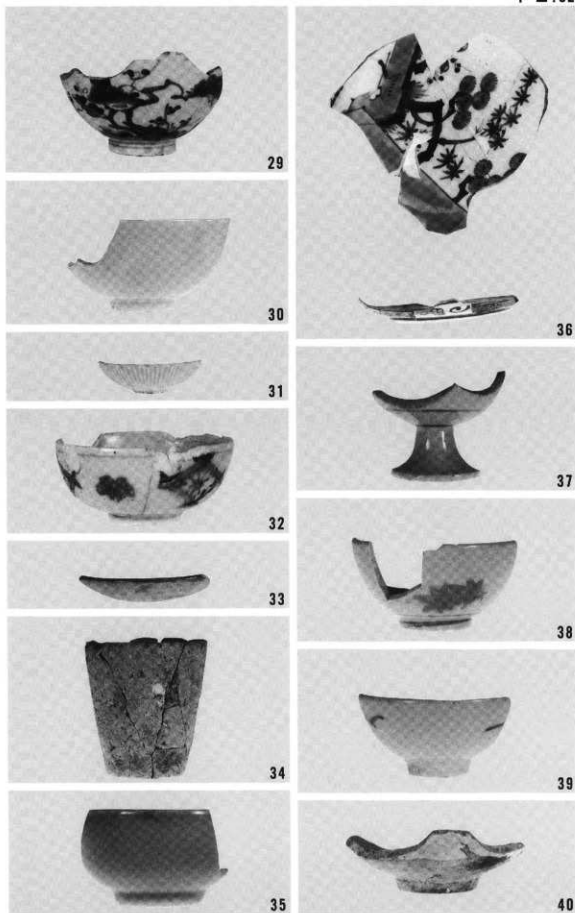
26



27

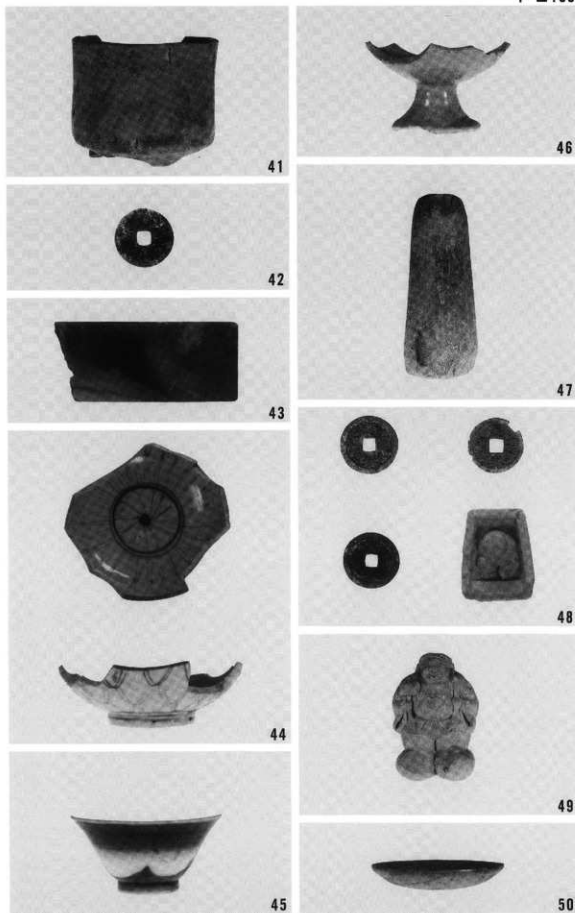


28

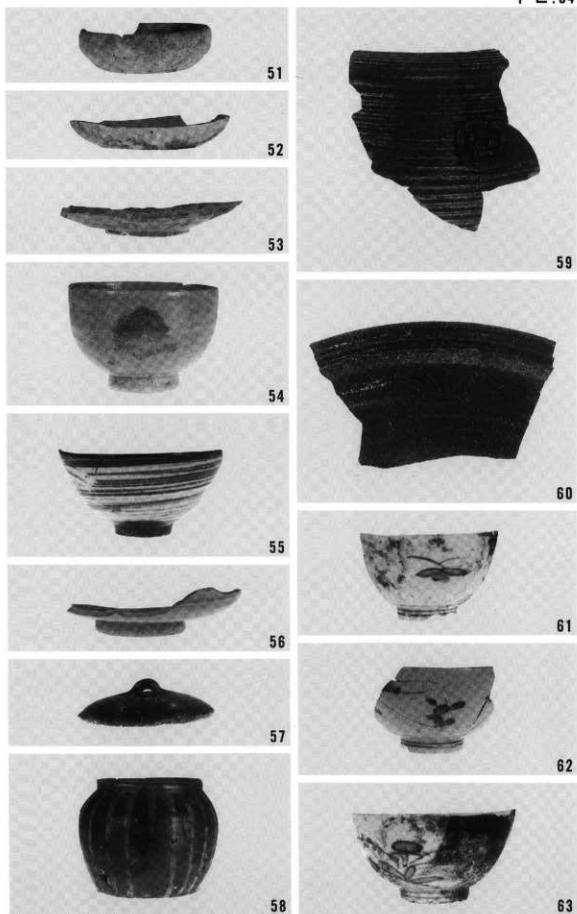


第58次調査出土遺物(4) 29~32 土坑30, 33~39 土坑31, 40 溝1





第58次調査出土遺物(5) 41~43 第2次焼土層, 44~49 第4層, 50 第1次焼土層



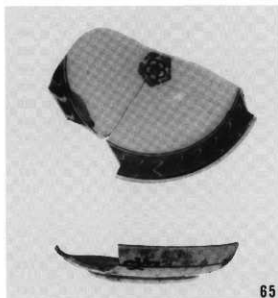
第58次調査出土遺物(6) 51~63 第1次焼土層



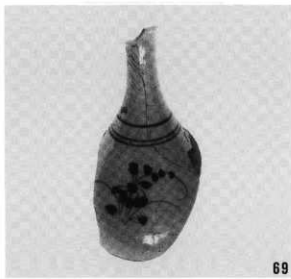
64



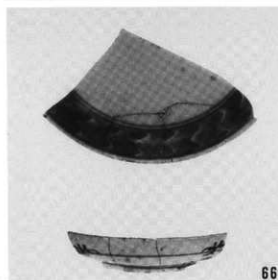
68



65



69



66



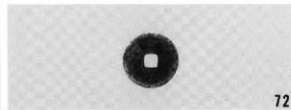
70



71



67



72



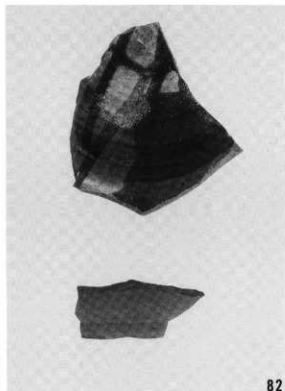
73



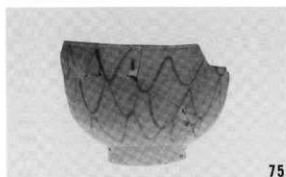
81



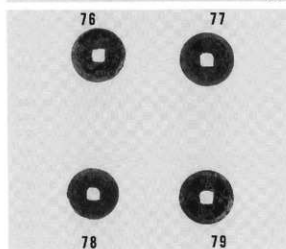
74



82



75



76

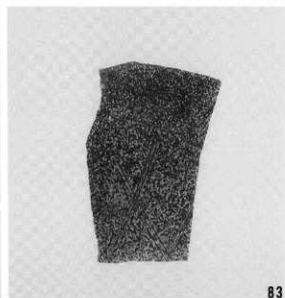
77

78

79

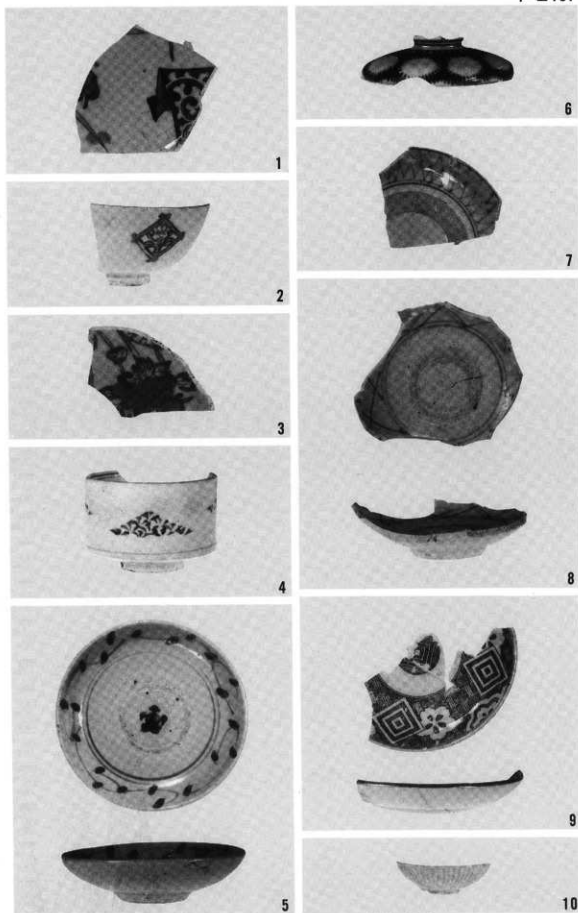


80



83

第58次調査出土遺物(8) 73・74 第1次焼土層, 75 第6層直上, 76~79 第6層, 80~82 第7層, 83 第8層直上



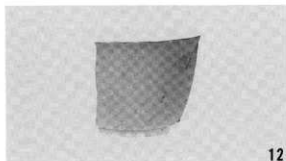
第59次調査出土遺物(1) 1~4 土坑13, 5 土坑12, 6~10 第2層上面



11



13



12



14

第59次調査出土遺物(2) 11~14 第2層上面

